

体を動かす楽しさや心地よさを

味わう子どもを育てる体づくり運動の学習指導

ー 自己の体力に応じて運動をつくり変える活動を通して ー

長期派遣研修員（飯塚市立庄内小学校 教諭）

山田 光祐

I 主題設定の理由

1 社会の要請から

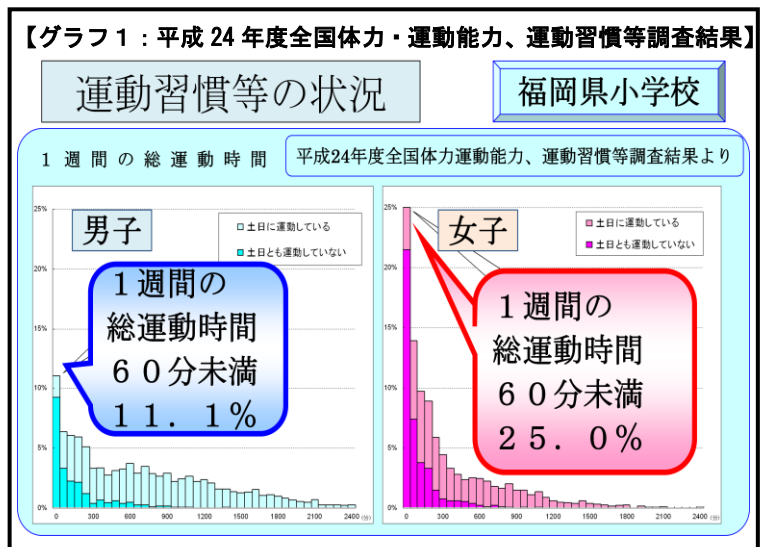
子どもの日常生活において、運動遊びによる基本的な身体活動の経験が著しく減少している。運動遊びの減少は、子どもの体力・運動能力の低下、人と人のかかわりやコミュニケーション能力の低下等にも影響を与えていると考える。

【グラフ1】は、平成24年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査における福岡県の小学5年生の結果である。実態として、男子の約11.1%、女子の約25.0%が、体育科の学習以外での運動時間が1週間に60分未満であるという結果が出ている。これに該当する子どもたちは、1週間にほとんど体を動かしていないことになる。さらに、運動やスポーツをしない理由について、特に多かったのが、「してみたいと思わない」や「疲れる」、「運動が苦手」等であった。このことは、子どもたちが日常的に体を動かす楽しさや心地よさを味わうことができておらず、運動への関心が極めて低いことを示している。

そこで本研究において、子どもたちに体を動かす楽しさや心地よさを味わわせることは、運動嫌いの子どもの減らし、自ら運動に親しむ資質や能力を育み、体育科の究極的な目標である「楽しく明るい生活を営む態度を育てる」ことにつながると考える。

2 教育の動向から

平成20年の中央教育審議会答申において、運動する子どもとそうでない子どもの二極化や、子どもの体力低下傾向の問題に対して、「体力は、人間の活動の源であり、健康の維持のほか意欲や気力といった精神面の充実に大きくかかわっており、『生きる力』の重要な要素である。子どもたちの体力の低下は、将来的に国民全体の体力低下につながり、社会全体の活力や文化を支える力が失われることにもなりかねない。そのため、幼いころから体を動かし、生涯にわたって積極的にスポーツに親しむ習慣や意欲、能力を育成することが重要である。」と記されている。



また、小学校の体育科目標において、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことに重点が置かれ、児童が心身の発達の特性にあった運動を実践することによって、運動の楽しさや喜びを味わい、このような経験を通して、児童の運動に対する親しみを育てることを目指すこととしている。

これらのことから本研究において、「体を動かす楽しさや心地よさを味わう子ども」の育成を図ることは、子ども一人一人の体力・運動能力低下の問題、また豊かなスポーツライフの実現に対し、体を動かす心地よさを感じながら積極的に運動にかかわろうとする態度を育むという点で大変意義深いと考える。

3 これまでの指導の反省から

運動の二極化傾向や体力低下の問題を背景に、小学校学習指導要領（平成 20 年 3 月告示）において、すべての学年で「体づくり運動」を実施することが示された。「体づくり運動」の学習を通して、子どもの体力を直接的に向上させ、さらには日常生活や各種の運動の中に応用し、実践できる能力を育んでいかなければならない。しかし、これまでの私は、「体づくり運動」の学習指導において、基本的な動きを身に付けることや体力を高めることばかりに重きを置き、体を動かすことそのものの楽しさや心地よさを味わわせることができていなかった。子どもの興味・関心を欠いた単調な動きの反復が多く、子どもたちの実態を踏まえた楽しい教材作り等の意識が低かったと考える。これでは、子どもたちは、運動に親しむことができず、日常的な運動習慣につながらない。

そこで、本研究において「体づくり運動」を取り上げ、工夫した教材や活動を通して、仲間とかかわり合いながら楽しく運動する学習を仕組めば、どの子にも体を動かす楽しさや心地よさを味わわせることができ、子ども自らが体を動かすことにもつながると考える。これらのことは、生涯にわたって運動を豊かに実践していくことの基礎を培う上でも意義深いと考え、本主題を設定した。

II 主題・副主題の意味

1 主題の意味

(1) 「体を動かす楽しさや心地よさ」について

「体を動かす楽しさ」とは、	
・記録に挑戦し、達成すること	(達成)
・難易度の高い運動に挑戦し、克服すること	(克服)
・競い合って勝敗を争うこと	(競争)
・感情や考えを身体の動きで表現すること	(表現)
「体を動かす心地よさ」とは、	
・伸び伸びと解放的に動くこと	(壮快)
これらによって表出する快の感情のことである。	

「体を動かす楽しさ」である(達成)・(克服)・(競争)・(表現)については、「成し遂げられた」「できるようになった」「勝てた」など、自己の能力水準に見合った目標における成就感を得ることのできるものである。

「体を動かす心地よさ」である（壮快）は、体を動かすことそのものの気持よさを感じることでできるものである。

（２）「体を動かす楽しさや心地よさを味わう子ども」について

体を動かす楽しさや心地よさを味わう子どもとは、自己の能力水準に見合った記録の達成や運動の克服・競争・表現などによる楽しさや解放的に体を動かす心地よさを感じながら、のびのびと体を動かす子どものことである。

本研究では、体を動かす楽しさや心地よさを味わう子どもについて、「運動への関心・意欲・態度」「運動についての思考・判断」「運動の技能」の３つの資質や能力を満たす目指す子どもの姿として、【表１】のようにとらえた。

【表１：目指す子どもの姿】

資質や能力	目指す子どもの姿
運動への関心・意欲・態度	・ 精一杯体を動かしながら、のびのびと運動に取り組もうとする子ども ・ 仲間とかかわり合いながら声をかけ合って運動に取り組もうとする子ども
運動についての思考・判断	・ 自己の体力の実態に応じた課題を設定することができる子ども ・ 体力を高める運動を自己の体力に応じた難易度の運動につくり変えることができる子ども
運動の技能	・ 体力を高める運動について、ねらいに合った動きを理解し、その動きを実践することができる子ども

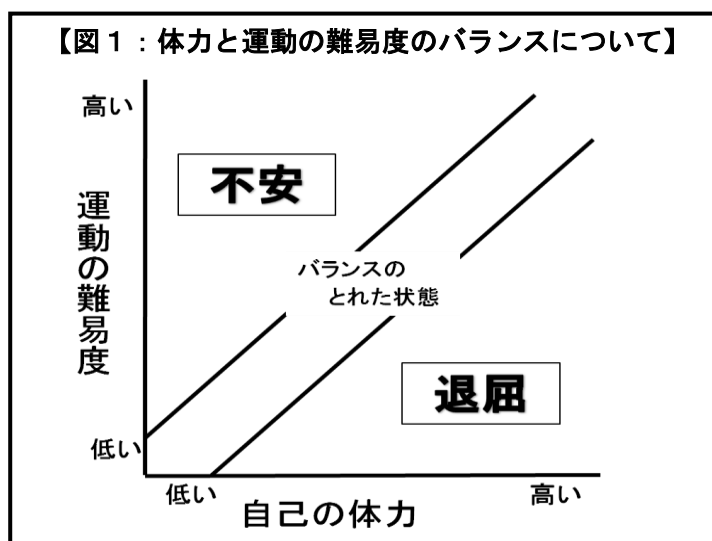
２ 副主題の意味

（１）「自己の体力に応じて」について

自己の体力に応じてとは、自己の体力（体の柔らかさ及び巧みな動き、力強い動き及び動きを持続する能力）の実態に合うようにすることである。

体力とは、小学校学習指導要領解説体育編に示す体づくり運動領域の「体力を高める運動」にある「体の柔らかさ及び巧みな動き・力強い動き及び動きを持続する能力」のこととする。

体力の実態に合うとは、自己の体の柔らかさ及び巧みな動き、力強い動き及び動きを持続する能力における実態と運動の難易度のバランスがとれている状態を表す。つまり、【図１】に示すように学習者に対して、運動が易しすぎず、難しすぎないということである。このことによって、意欲的に運動に取り組むことができると考える。



(2)「運動」について

運動とは、「動き」や「場」から構成されるものである。

「動き」とは、(空間)・(時間)・(強度) からとらえる。さらに「場」について (物理的な面)・(人的な面)・(観念的な面) の三点からとらえる。具体的に「動き」と「場」の内容を【表2】のようにとらえる。

【表2：「動き」と「場」について】

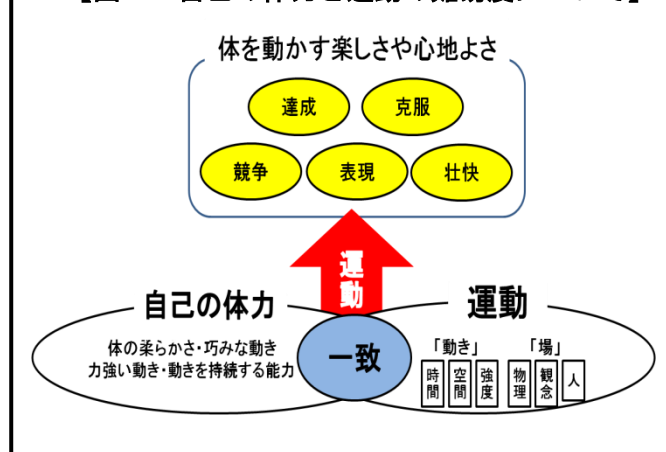
「動き」について	空間	形態 方向 高さ 距離
	時間	速さ リズム タイミング 長さ
	強度	回数 強さ
「場」について	物理的	広さ 形 区域 用具の大きさ 高さ 位置 数
	人的	競争や対戦相手 役割 能力差
	観念的	ルール 作戦 マナー 約束ごと

(3)「自己の体力に応じて運動をつくり変える」について

自己の体力に応じて運動をつくり変えるとは、自己の体力 (体の柔らかさ及び巧みな動き・力強い動き及び動きを持続する能力) の実態に合うように「動き」や「場」の内容を変化させることである。

自己の体力の実態に合うように「動き」や「場」の内容を変化させるとは、【図2】のように運動の難易度を「動き」と「場」の内容を変化させることによって、自己の体力と一致させることである。実施する運動が自分の体力の水準に合っていることが、体を動かす楽しさや心地よさにつながると考える。

【図2：自己の体力と運動の難易度について】



(4)「自己の体力に応じて運動をつくり変える活動」について

自己の体力に応じて運動をつくり変える活動とは、自己の体力の実態に気付くための「気付く活動」と、ねらいに応じた運動を理解するための「理解する活動」、そして自己の体力に応じて運動をつくり変えるための「つくり変える活動」を行う一連の活動のことである。

自己の体力に応じて運動をつくり変えるためには、まず「自己の体力について正確な把握」が必要である。そして、実際に行う「運動のねらいや正しい動きについての理解」が必要となる。「体力の実態把握」と「運動の理解」、これらの条件が整ってはじめて、自己の体力に応じた運動のつくり変えが可能となると考える。

【表3～5】は自己の体力に応じて運動をつくり変える活動の目的・内容・方法について整理したものである。

【表 3：自己の体力に応じて運動をつくり変える活動「気付く活動」の目的・内容・方法】

自己の体力の実態に気付くための「気付く活動」	
目的	○自己の体力（体の柔らかさ及び巧みな動き・力強い動き及び動きを持続する能力）の実態に気付くため
内容	○自己の「体力を高める運動」における体力の実態を把握する。
方法	○新体力テスト結果のレーダーチャート化（P10【図4】） ○試しの運動体験

「気付く活動」とは、【表 3】にあるように自己の体力の実態を把握するための活動である。子どもたちは、自己の体力において、具体的にどの要素が高く、そして低いのか、詳しいことについては把握できていない。そこで、まず1つ目の活動として、「新体力テストのレーダーチャート化」を行う。自己の体力テストの記録について、その結果を視覚的にわかりやすくなるようにレーダーチャート化させる。そのことで、グラフの形から自己の体力について把握しやすくなる。さらに全国平均と比較することを通して、客観的に自己の体力についてとらえることができるようになる。次に2つ目の活動として、「試しの運動体験」を行う。実際に「体の柔らかさ」を高めるための運動や「巧みな動き」を高めるための運動、「力強い動き」を高めるための運動、「動きを持続する能力」を高めるための運動を体験することを通して、実感を伴った自分の体力の把握が可能となる。これらの2つの活動を通して、自己の体力の実態を把握するものとする。

【表4：自己の体力に応じて運動をつくり変える活動「理解する活動」の目的・内容・方法】

ねらいに応じた運動を理解するための「理解する活動」	
	
目的	○「体力を高める運動」（体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動・力強い動き及び動きを持続させる能力を高めるための運動）におけるねらいに応じた運動を理解するため
内容	○「体力を高める運動」における運動のねらいや動きを理解する。
方法	○動きの相互評価 ○ねらいに応じた運動を把握するための資料の活用（P10【図5】） ○運動を評価するためのステップアップ評価ノートの活用（P10【図6】）

「理解する活動」とは、【表4】にあるようにこれから出会う運動に対して、その運動のねらいや正しい動き、場について理解するための活動である。「運動のねらいや正しい動き、場についての理解」とは、例えば、「前屈ボール運び」では、「体の柔らかさを高める」というねらいと、「膝を曲げないようにして、腰からゆっくりと前屈する」という正しい動きやそれらの動きを行う場について知ることである。このために3つの活動を行う。まず1つ目の活動として、「動きの相互評価」を行う。互いに運動を見合い、「正しい動きができているか」の視点で評価し合う。2つ目の活動として、「ねらいに応じた運動を把握するための資料の活用」を行う。この資料には、運動のねらいや正しい動き方や場について示してあり、これを参考にして実際に運動を行ったり、他者の運動を評価することで運動の理解につなげる。3つ目の活動として、「運動を評価するためのステップアップ評価ノートの活用」を行う。運動を行ったあと、自己の運動について、振り返ったり、仲間からもらったアドバイスなどを記入したりすることを通して、さらに運動についての理解を深める。これらの3つの活動を通して、ねらいに応じた運動を理解するものとする。

【表5：自己の体力に応じて運動をつくり変える活動「つくり変える活動」の目的・内容・方法】

自己の体力に応じた運動につくり変えるための「つくり変える活動」	
目的	○自己の体力に応じた難易度の運動につくり変えるため
内容	○運動を体験したあと、自分に合った難易度の運動につくり変える。
方法	○運動体験をもとにした自己評価・相互評価 ○自己の体力に応じた運動を把握するための資料の活用（P11【図7】）

「つくり変える活動」とは、【表5】にあるように自己の体力に応じた運動につくり変える活動のことである。「自己の体力に応じた運動につくり変える」とは、例えば、教師がはじめに提示した「前屈ボール運び」が、自分にとって「簡単すぎる」と判断した場合、自分が運動を行っている台の高さをさらに高くし、ボールまでの距離を伸ばすことで、難易度の高い運動へと変えることである。このために2つの活動を行う。まず1つ目の活動は、「運動体験をもとにした自己評価や相互評価」を行う。実際に運動を体験してみた感じや他者からの評価によって、その運動が自分の体力に合っているのかを判断する。そのことを通して、運動を易しくつくり変える、そのまま取り組む、または難しくつくり変えることへとつなげる。2つ目の活動は、「自己の体力に応じた運動を把握するための資料の活用」を行う。子どもたちに、運動のねらいを考慮しながらつくり変えを行わせるために「運動のレベルを変える視点」を示した資料を提示し、スムーズなつくり変えができるようにする。これらの2つの活動を通して、自己の体力に応じた運動につくり変えるものとする。

Ⅲ 研究の目標

自己の体力に応じて運動をつくり変える活動を通して、体を動かす楽しさや心地よさを味わう子どもを育てる体育科体づくり運動の学習指導の在り方を究明する。

Ⅳ 研究の仮説

体づくり運動の学習において、以下の工夫を行えば子どもたちは体を動かす楽しさや心地よさを味わい、意欲的に運動に取り組むことができるであろう。

【視点１】子どもの実態や体づくり運動の特性に即した教材化の工夫

【視点２】運動をつくり変える活動を位置付けた活動構成の工夫

【視点３】運動をつくり変える活動を活発にする具体的支援の工夫

Ⅴ 研究の具体的構想

１ 子どもの実態や体づくり運動の特性に即した教材化の工夫

子どもの実態や体づくり運動の特性を把握して、以下の４つの視点を生かした教材を開発・選定する。

○ねらいに合った運動ができること	【価値性】
○自己の体力に応じて、運動を再編成（つくり変える）できること	【発展性】
○達成・克服・競争・表現・壮快などの楽しさや心地よさが味わえること	【プレイ性】
○仲間と一緒に活動することができること	【協同性】

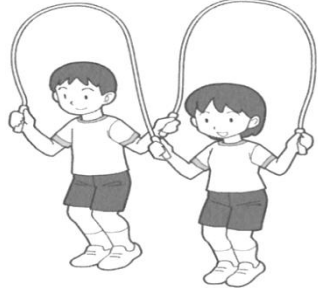
以下、【表６】は、「体づくり運動」の特性について整理したものである。

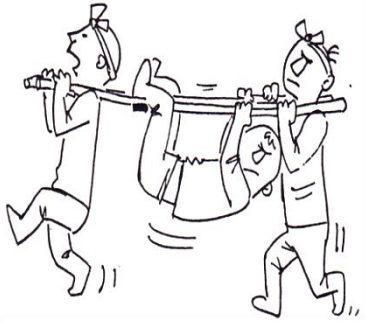
【表６：「体づくり運動」の特性】

「体づくり運動」	「体ほぐしの運動」	「体力を高める運動」
一般的特性	今、持っている力で手軽な運動や律動的な運動を行い、自分や友だちの体の状態に気付いたり、体の調子を整えたり、友だちと豊かに交流したりすることができる運動である。	直接的に体力を高めることがねらいになっている。児童一人一人の体力や能力に応じて運動を工夫しながら体力を高めることができる運動である。
児童から見た特性	勝敗がなく、リラックスして取り組める運動であり、自然と心身を解きほぐすことができたり、身のこなしをよくしたりすることができる。	自己の体力に応じて課題を設定し、それぞれの課題を解決していくことで体力の高まりを実感することができる。また、運動を通して仲間と協力し合ったり、励まし合ったりすることのできる運動である。

これらの特性を踏まえて、教材として提示する運動について【表７】のように考えた。

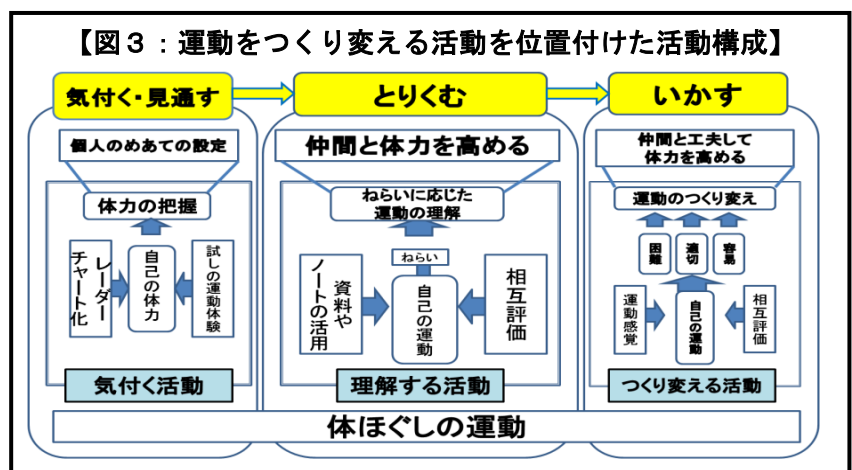
【表 7：提示する「体力を高める運動」の運動例とその解説】

運動名（運動の種類）	【二人なわ跳び】（巧みな動きを高めるための運動）	
運動の行い方	内側の手で相手の「跳びなわ」を互いに持ち、2人でタイミングを合わせて跳ぶ。	
【価値性】	タイミングよく動く能力を高める。	
【発展性】	跳び方や跳ぶ人数を変えて発展させる。	
【プレイ性】	目標とする回数を跳ぶことによる「達成」の楽しさを味わう。	
【協同性】	仲間と一緒に動きを合わせながら跳ぶ。	

運動名（運動の種類）	【かごや】（力強い動きを高めるための運動）	
運動の行い方	2本の棒に手・足でつかまった状態で仲間に運んでもらう。	
【価値性】	手・腕の筋力を高める。	
【発展性】	運んでもらう距離を変えて発展させる。	
【プレイ性】	目標とする距離を運んでもらう間、落ちないようにする「達成」の楽しさを味わう。	
【協同性】	仲間に運んでもらいながら運動する。	

2 運動をつくり変える活動を位置付けた活動構成の工夫

単元を、自己の体力の実態を把握し、学習についての課題と見通しを持つための「気付く・見通す」段階と、ねらいに応じた体力を高める運動について理解し、仲間とかかわり合いながら運動に取り組むための「とりくむ」段階、自己の体力に応じた体力を高める運動を選び、仲間と工夫して運動に取り組むための「いかす」段階をつないで、運動をつくり変える活動を位置付け、【図 3】のように編成する。

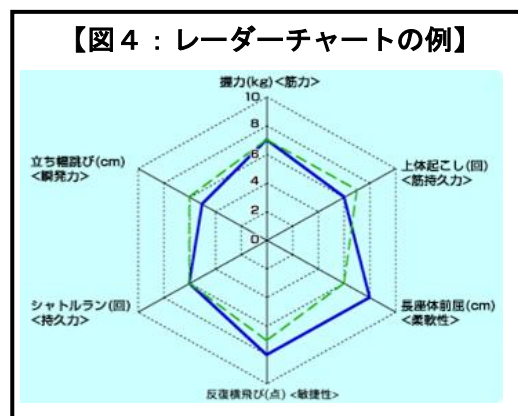


3 運動をつくり変える活動を活発にする具体的支援の工夫

(1)「気付く活動」における支援

○自己の体力テスト結果について検討するためのレーダーチャート

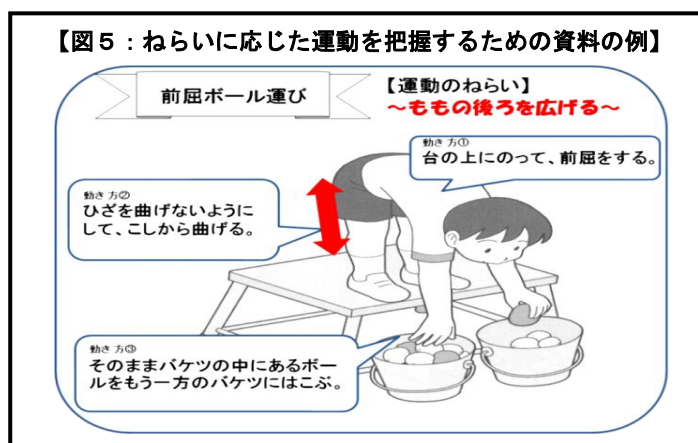
1学期に実施した体力テストの結果をあらかじめ学習ノートに記入しておき、【図4】のようにレーダーチャート化による自己評価をさせ、自己の体力の実態について気付かせる。レーダーチャート化することによって、子どもたちは、視覚的に自分の体力について把握しやすくなる。また、全国平均値と比較させることによって、自分はどの体力要素に課題があるのかを見極め、今後の学習についての課題意識と見通しにつなげる。



(2)「理解する活動」における支援

○ねらいに応じた運動を把握するための資料

子どもたちがねらいに応じた運動を把握することができるように、「ねらいに応じた運動を把握するための資料」を提示する。この資料をもとに自分や仲間の運動について、ねらいに応じた動きができているかを自己評価・相互評価し、各種のねらいを持った運動に正しい行い方で取り組むことができるようにする。



○運動を評価するためのステップアップ評価ノート

ステップアップ評価ノートとは、自己の運動について、ねらいに応じた動きを理解することができたか、実践することができたかの視点で自己評価・相互評価しながら運動についての理解を深め、記録していく学習ノートのことである。また、仲間との評価活動において、自己の運動に対するアドバイスや明確になった課題についても記録していく。それらを活用して、運動の理解や実践につなげていくものとする。

【図6：ステップアップ評価ノートの例】

「手押し車」 ～腕・腰の筋力を高める～

仲間からのアドバイス（アドバイスをくれた人の名前）

動き方	動き方がわかったか			動きができるようになったか		
	よくわかった	少しはわかった	わからない	できた	少しできた	できない
① 腕立てぶせの状態になり、補助の人に足をかかえてもらう。						
② こし・足を伸ばして腕を使って前に進む。						
③ コーンの場所まで往復する。						

(3)「つくり変える活動」についての支援

○自己の体力に応じた運動を把握するための資料

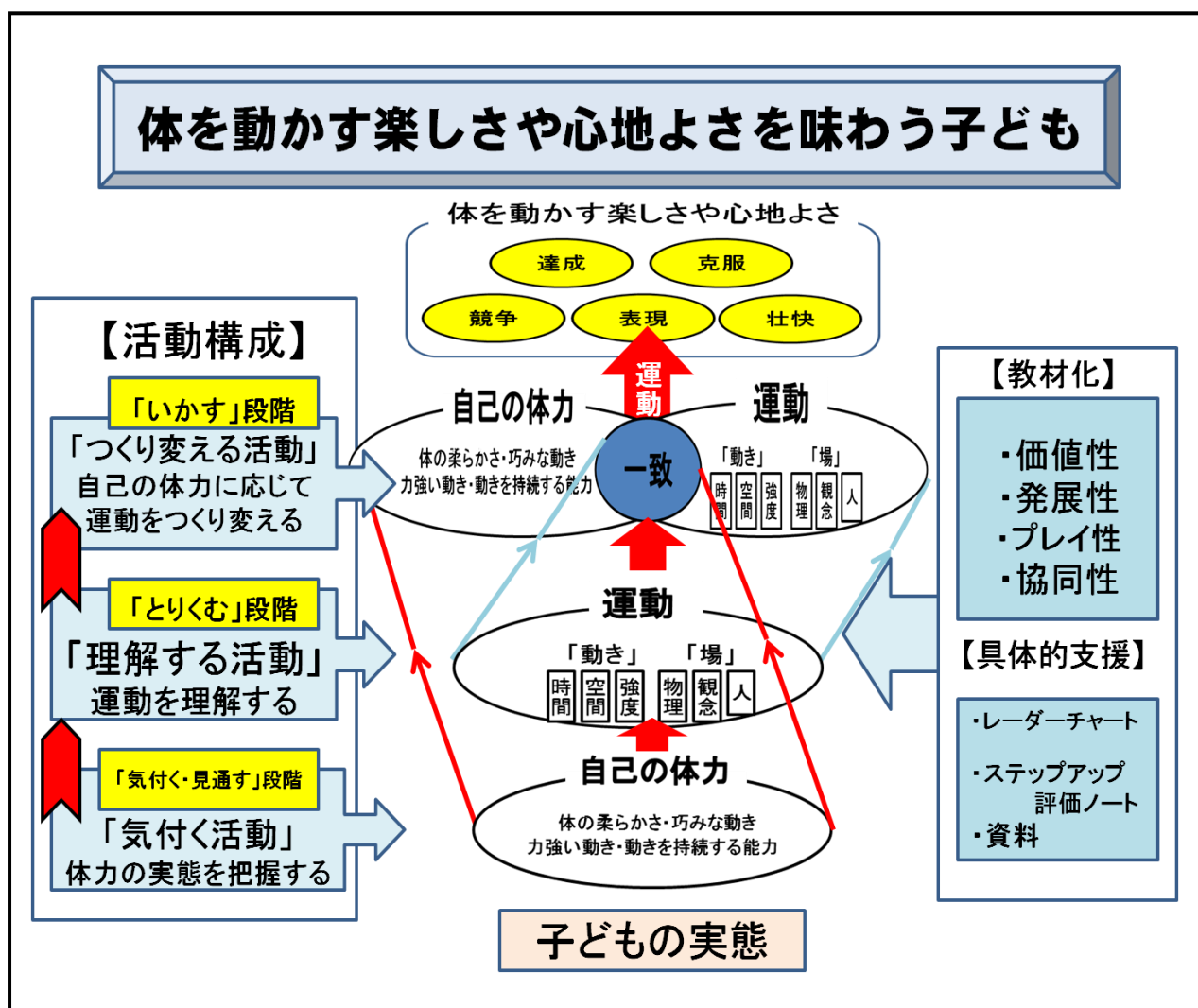
自己の体力に応じて運動をつくり変えるために【図7】のような「自己の体力に応じた運動を把握するための資料」を提示する。運動の体験をもとにその難易度の運動が自分に合っているかを自己評価、相互評価し、この資料にある「レベルを変える視点」を参考にして、自己の体力に合った運動につくり変える。

【図7：自己の体力に応じた運動を把握するための資料の例】

「二人なわ跳び」～続けて10回跳べたらクリア～
 ○レベルを変える視点
 → 「跳び方」
 → 「跳ぶ人数」



4 研究構想図



5 仮説検証の方途

(1) ねらい

仮説に基づく検証授業により資料を収集し、結果の分析により仮説を検証する。

(2) 対象

飯塚市立庄内小学校 第5学年1組 31名（男子15名 女子16名）

(3) 期間

平成25年10月4日（金）～11月7日（木）

(4) 内容と方法

仮説を検証するために、学習指導計画に従って「体づくり運動」の授業と事前・事後調査を実施し、データを収集する。

【検証の内容】

- ア 精一杯体を動かしながら、のびのびと運動に取り組もうとする子ども
- イ 仲間とかかわり合いながら声をかけ合って運動に取り組もうとする子ども
(運動への関心・意欲・態度)
- ウ 自己の体力の実態に応じた課題を設定することができる子ども
- エ 体力を高める運動を自己の体力に応じた難易度の運動につくり変えることができる子ども
(運動についての思考・判断)
- オ 体力を高める運動について、ねらいに合った動きを理解し、その動きを実践することができる子ども
(運動の技能)

【方法】

- 事前・事後のアンケートによる調査
- 学習の様相観察
- 授業後の感想
- 個人のめあて
- 学習ノートの記事
- 形成的授業評価 (「体育の授業を観察評価する」高橋健夫 H16, 8)
- 診断的・総括的授業評価の分析 (「体育の授業を観察評価する」高橋健夫 H16, 8)

段階	資質や能力	内容	主となる手立て	検証の方法	評価の観点
気付き・見通す段階	運動への関心・意欲・態度	ア	・教材化の工夫	形成的授業評価 (意欲・関心因子) 授業後の感想 学習の様相観察	・精一杯体を動かしながら、のびのびと運動に取り組むことができたか。

気付く・見通す段階	運動についての思考・判断	ウ	・「気付く活動」 ・レーダーチャート	個人のめあて授業後の感想	・自己の体力の実態に応じた課題を設定することができたか。
とりくむ段階	運動への関心・意欲・態度	イ	・教材化の工夫 ・「理解する活動」	形成的授業評価（協力因子） 学習ノートの記述 学習の様相観察	・仲間とかかわり合いながら声をかけ合って運動に取り組むことができたか。
	運動の技能	オ	・教材化の工夫 ・「理解する活動」 ・ねらいに応じた運動を把握するための資料 ・ステップアップ評価ノート	形成的授業評価（成果因子） 学習ノートの記述 学習の様相観察	・体力を高める運動について、ねらいに合った動きを理解し、その動きを実践することができたか。
いかす段階	運動についての思考・判断	エ	・教材化の工夫 ・「つくり変える活動」 ・自己の体力に応じた運動を把握するための資料	学習ノートの記述 学習の様相観察	・体力を高める運動を自己の体力に応じた難易度の運動につくり変えることができたか。

VI 研究の実際と考察

実践例 平成 25 年度 10 月 7 日（月）～11 月 6 日（水）（全 7 時間）
 飯塚市立庄内小学校 第 5 学年 1 組 於 体育館
 単元名 「体づくり運動」

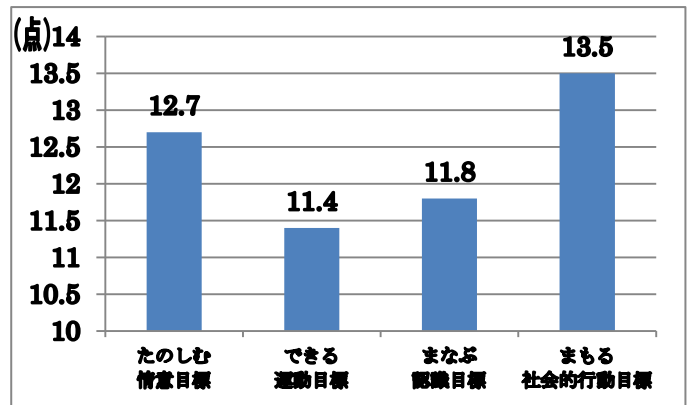
1 事前調査（実施日 平成 25 年 7 月 10 日）

（1）診断的授業評価

子どもの体育科の学習に対する意識について調査するために、授業評価尺度（高橋、岡澤、高田ら 2000）を用いた診断的授業評価を行った。【グラフ 2】に示した結果から、学級全体の総合評価の平均は、49.5 点で小学校段階の診断基準 0（49.61～42.80）内に位置しており、体育科の学習に関してやや高い意欲を持っている学級であることがわかった。項目ごとに詳しく見てみると、本主題に関

わる「たのしむ（情意目標）」の因子については、比較的高い結果が出ており、体育科の学習において、楽しいと感じている子どもがやや多いことがわかった。しかし、「できる（運動目標）」の因子や「まなぶ（認識目標）」の因子において、他の「たのしむ（情意目標）」や「まもる（社会行動目標）」と比べてやや低い数値を示しており、授業構成に達成感や克服感を味わわせる教材や手立てを仕組む必要があることがわかった。

【グラフ2：学級全体の診断的授業評価の結果】

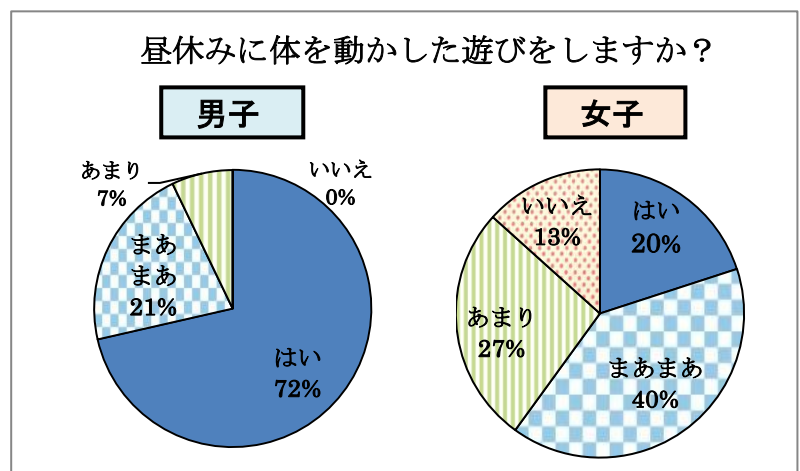


(2) 運動習慣に関する調査

○学校生活における体を動かした遊びについて

アンケートにおいて、学校生活における体を動かした遊びについての実態を把握するための調査を行った。【グラフ3】は、男女別による結果を示したものである。女子において「しない」または、「あまりしない」の割合が40%と高く、学校生活において日常的に体を動かしていない子どもが多いことがわかった。

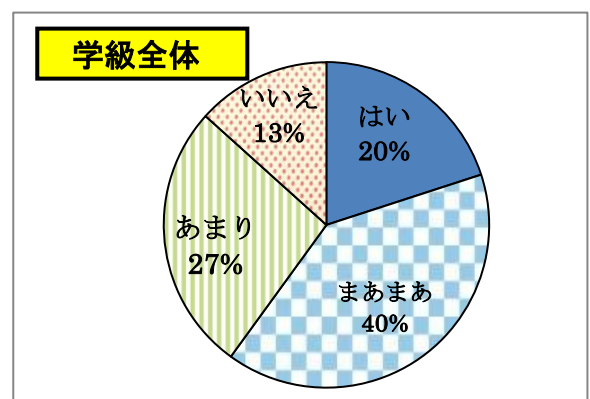
【グラフ3：学校における体を動かした遊びに関する調査結果】



○「体育が好きか」について

アンケートにおいて、「体育が好きか」についての実態を把握するための調査を行った。【グラフ4】は、その結果を示したものである。体育は好きですか？の質問に対して本学級の34%の子どもが「いいえ」または、「あまり」と答えた。この結果をさらに分析したところ、「いいえ」「あまり」と答えた子どもの多くが、日常的にも体を動かした遊びが少なく、学校や家庭においてもあまり運動していないということが分かった。

【グラフ4：「体育が好きか」についての調査結果】

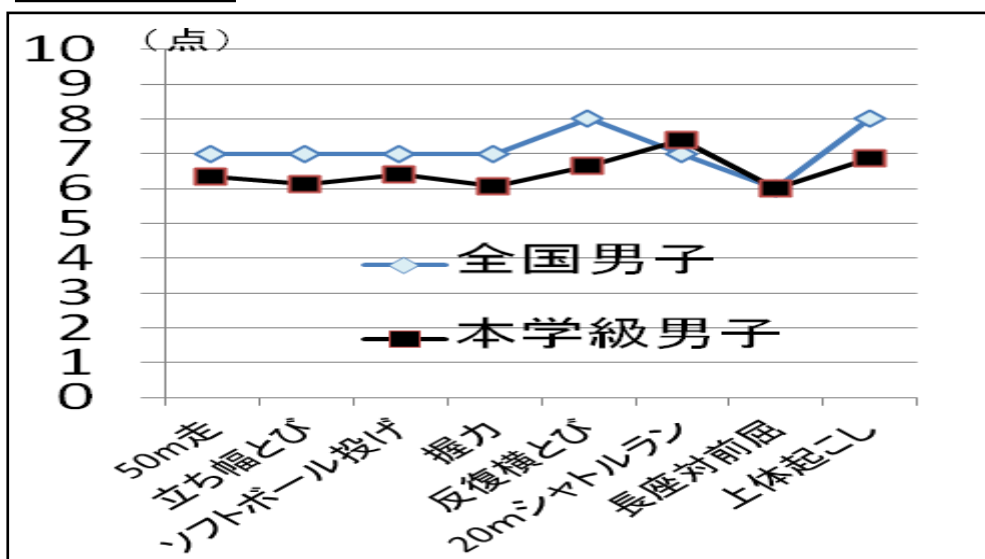


(3) 体力テスト結果の分析

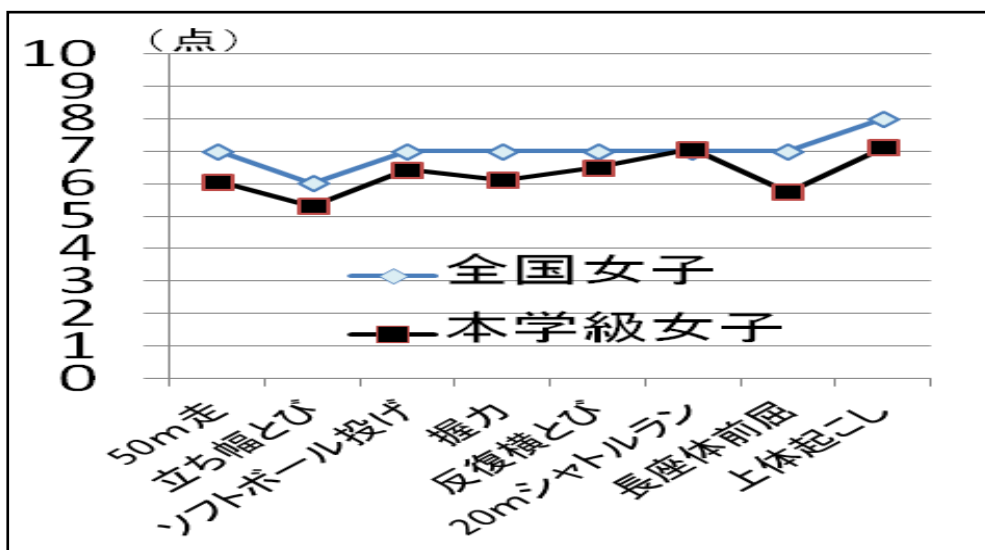
本学級の体力の実態を明らかにするために、5月に実施された新体力テストの結果について分析を行った。【グラフ5】は、体力テストの結果を得点化し、それを全国平均値（平成24年度体力・運動能力調査報告による）と比較したものである。男子、女子ともに同じような傾向を見せており、ほとんどの種目において、全国平均値を下まわっていることがわかる。

【グラフ5：男女別の得点化した体力テストの結果】

男子



女子



以上の実態や3学期に「動きを持続する能力を高めるための運動」を学習する計画があるため、本単元では、体力を高める運動に示される4種類の運動のうち、「体の柔らかさを高めるための運動」、「巧みな動きを高めるための運動」、「力強い動きを高めるための運動」の3つの運動に絞って行うことにする。また、高学年児童の発達の段階を考慮し、「体の柔らかさを高める

ための運動」と「巧みな動きを高めるための運動」に重点を置いて指導することとする。

これらの調査結果をもとに、以下の通り抽出児ABCを設定した。

	抽出児	診断的授業評価	学校で体を動かし た遊びを行うか	体育が好きか	新体力テスト 総合評価
上位	A児（男子）	＋（学級平均より高い）	行う	好き	B判定
中位	B児（女子）	＋（学級平均より高い）	まあまあ行う	好き	C判定
下位	C児（女子）	0（学級平均より低い）	まあまあ行う	あまり好きではない	E判定

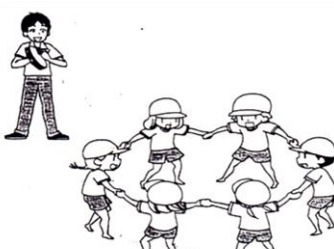
2 「気付く・見通す」段階（第1・2時）

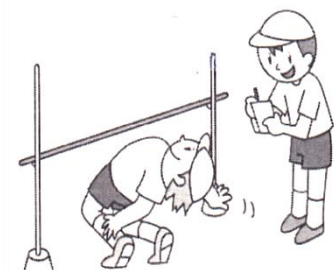
（1）目指す子どもの姿

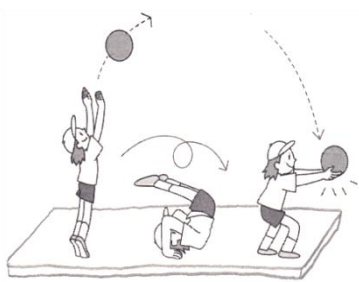
○精一杯体を動かしながら、のびのびと運動に取り組もうとする子ども	（関心・意欲・態度）
○自己の体力の実態に応じた課題を設定することができる子ども	（思考・判断）

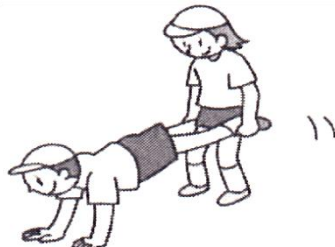
（2）手だて

○子どもの実態や体づくり運動の特性に即した教材化の工夫（※第2時に取り扱った教材）

【運動名】(運動の種類)	【みんなでジャンプ】(体ほぐしの運動)	
運動の行い方	教師の「前」「後」「右」「左」等の指示に合わせて、全員が手をつないで輪になった状態で指示された方向へと一斉に（方向を唱えながら）ジャンプする。	
【価値性】	仲間と交流する。	
【発展性】	指示と逆にジャンプする等に発展させる。	
【プレイ性】	全員が間違えず同じ方向へとジャンプする「達成」の楽しさを味わう。	
【協同性】	仲間と一緒に手をつないで同じ動きをする。	

【運動名】(運動の種類)	【リンボーダンス】(体の柔らかさを高めるための運動)	
運動の行い方	ひざ・腰・背を後ろに反りながらゴムに触れないように通過する。	
【価値性】	背・腰の柔軟性を高める。	
【発展性】	ゴムの高さを変えることで発展させる。	
【プレイ性】	目指すゴムの高さに対する「達成」の楽しさを味わう。	
【協同性】	ゴムに触れていないか、互いに仲間と見合いながら運動する。	

【運動名】(運動の種類)	【前転キャッチ】(巧みな動きを高めるための運動)	
運動の行い方	風船やボールを前方に投げ上げ、前転してから風船が落下する前にキャッチする。	
【価値性】	バランスをとりながら動く能力を高める。	
【発展性】	ボールの種類を変えて、発展させる。	
【プレイ性】	キャッチできたことに対する「達成」の楽しさを味わう。	
【協同性】	風船を投げ上げる位置を示し合いながら協力して運動する。	

【運動名】(運動の種類)	【手押し車】(力強い動きを高めるための運動)	
運動の行い方	仲間に両足を持ち上げてもらい、腕立て伏臥の状態状態で腕歩行する。	
【価値性】	腕・腹の筋力を高める。	
【発展性】	腕歩行する距離を変えて発展させる。	
【プレイ性】	目指す距離に対する「達成」の楽しさを味わう。	
【協同性】	仲間に両足を持ち上げてもらい、運動する。	

○運動をつくり変える活動を位置付けた活動構成の工夫（「気付く活動」）

【体力テスト結果のレーダーチャート化】

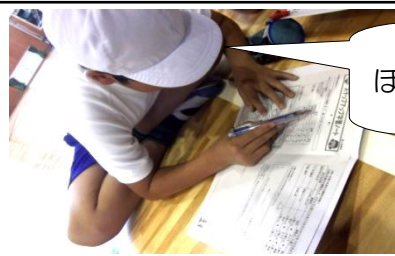
【試しの運動体験】

○運動をつくり変える活動を活発にする具体的支援の工夫

【レーダーチャート】

（３）授業展開

「気付く・見通す」段階では、自己の体力の実態を把握し、今後の学習についての課題と見通しを持たせるための活動を行った。

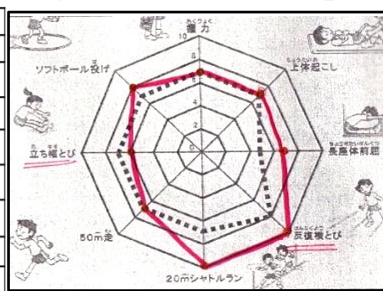
学習活動（◆） 教師の支援（◇）	子どもの姿（抽出児A児B児C児の姿を中心に）
（第2時） ◆体ほぐしの運動をして心と体のスイッチをオンにする。 手だて 教材化の工夫 【みんなでジャンプ】 「本時のめあて」 ～自分の課題に合った個人のめあてを立てよう！～ ◆新体力テストの結果をレーダーチャート化する。 手だて 【体力テスト結果のレーダーチャート化】	子どもの姿（抽出児A児B児C児の姿を中心に）  【写真1：体ほぐしの運動「みんなでジャンプ」を行うC児の様相】 仲間と一緒に体を動かすとても楽しい！  ぼくの課題は、柔軟性かぁ・・・ 【写真2：新体力テストのレーダーチャート化を行うA児の様相】

手だて
【レーダーチャート】

- ◇レーダーチャート内に全国平均のグラフを事前に点線で示しておく。
- ◇全国平均との比較によって自己の課題をつかませる。

【資料1：A児の新体力テストの記録とレーダーチャート】

体力の内容	種目	記録	得点
体のやわらかさ	長座体前屈	34cm	7
	たぐみな動き	反復横とび	51点
	立ち幅とび	153cm	6
力強い動き	上体おこし	19回	7
	握力	15.5kg	6
	ソフトボール投げ	34m	8
	50m走	9.05秒	7
動きを継続する能力	20mシャトルラン	98回	10



- ◆試しの運動体験を行う。

手だて
【試しの運動体験】

手だて 教材化の工夫
【リンボーダンス】
【前転キャッチ】
【手押し車】

- ◇運動のねらいや動き方を理解させて取り組ませる。

【写真3：体の柔らかさを高めるための運動（リンボーダンス）
巧みな動きを高めるための運動（前転キャッチ）
力強い動きを高めるための運動（手押し車）の様相】



「リンボーダンス」

「前転キャッチ」

「手押し車」



【写真4：前転キャッチに失敗するB児の様相】

前転キャッチができない・・・

- ◆試しの運動体験をふり返る。

- ◇学習ノートを使って試しの運動体験をふり返らせ、実感を伴った自己の課題について、つかませる。



【資料2：試しの運動体験のふり返り】

体力の内容	運動名	運動をした感じ
体のやわらかさ	リンボーダンス	苦手と感じた ● 得意と感じた ●
たぐみな動き	前転キャッチ	苦手と感じた ● 得意と感じた ●
力強い動き	手押し車	苦手と感じた ● 得意と感じた ●

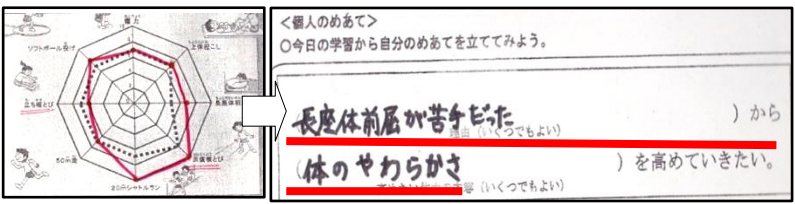
A児のふり返り

体力の内容	運動名	運動をした感じ
体のやわらかさ	リンボーダンス	苦手と感じた ● 得意と感じた ●
たぐみな動き	前転キャッチ	苦手と感じた ● 得意と感じた ●
力強い動き	手押し車	苦手と感じた ● 得意と感じた ●

B児のふり返り

体力の内容	運動名	運動をした感じ
体のやわらかさ	リンボーダンス	苦手と感じた ● 得意と感じた ●
たぐみな動き	前転キャッチ	苦手と感じた ● 得意と感じた ●
力強い動き	手押し車	苦手と感じた ● 得意と感じた ●

C児のふり返り

学習活動（◆）教師の支援（◇）	子どもの姿（抽出児A児B児C児の姿を中心に）
◆レーダーチャート化と試しの運動体験から自己の体力に応じた個人のめあてを立てる。 ◆個人で立てためあてをもとに体力を高めていく学習を行っていき見通しを持つ。 ◇体力の必要性について考えさせ、今後の体力を高めていく学習についての見通しを持たせる。	【資料3：レーダーチャートを根拠にして書いたA児のめあて】  【写真5：めあてをもとに今後の学習の見通しを持つA児の様相】 

（4）考察

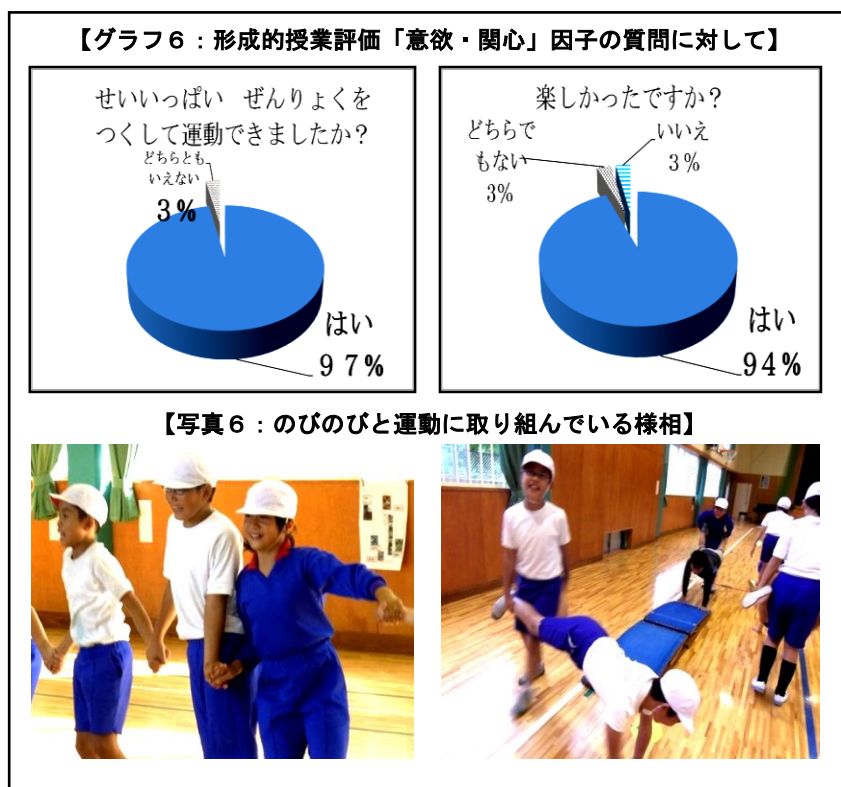
①関心・意欲・態度について

「気付く・見通す」段階で、子どもたちは、【みんなでジャンプ】【リンボーダンス】【前転キャッチ】【手押し車】の運動を行ったことで精一杯体を動かしながら、のびのびと運動に取り組むことができたと考える。

その根拠として、【グラフ6】にあるように第2時の形成的授業評価の因子「意欲・関心」の項目4（せいいっぱい ぜんりよくをつくして、運動できましたか。）において、97%の子どもが「はい」と答えていることや、質問項目5（楽しかったですか。）に対して、94%の子どもが「はい」と答えていることが挙げられる。

【写真6】の様子からも子どもたちが楽しそうに、のびのび

と運動に取り組んでいることがわかる。また、子どもの感想からも【資料4】のようにのびのびと体を動かして、楽しかったことや気持ちよかったことなどの記述が多く見られ、単元を始めるにあたって、運動に意欲的に取り組もうとする姿勢を見とることができた。



【資料4：「気付く・見通す」段階における抽出児の感想】

A児の感想	B児の感想
運動すると、心カスッキリし、楽しくなるとわかった。 心にも体にも	友達と一緒に体を動かして楽しかったです。むずかしいことも楽しく勉強できました。
C児の感想	友達としたり楽しいし、体もあつくなった。心がほかほかした。

以上のことから、「気付く・見通す」段階で教材化の工夫によって、関心・意欲・態度の目指す子どもの姿について到達したと考える。

②思考・判断について

「気付く・見通す」段階で、【体力テスト結果のレーダーチャート化】や【試しの運動体験（リンボーダンス・前転キャッチ・手押し車）】を行ったことで子どもたちは、自己の体力の実態に応じた課題を設定することができたと考える。

その根拠として、新体力テストの結果をレーダーチャート化したり、試しの運動体験を振り返ったりする活動からそれらの内容を根拠とした「個人のめあて」を立てることができた子どもが84%いたことが挙げられる。【資料5】に見られるように自己の体力の実態をもとに課題を設定し、本単元の学習に臨むことができた。

【資料5：自己の体力の実態に応じためあて】

手押し車 理由 (いくつでもよい) () から (<u>力強い動き</u>) を高めていきたい。 高めたい体力の内容 (いくつでもよい)	握力や、ソフトボール投げが苦手だ 理由 (いくつでもよい) () から (<u>力強い動き</u>) を高めていきたい。 高めたい体力の内容 (いくつでもよい)
前転キャッチのボールがとれなかったから 理由 (いくつでもよい) () から (<u>たくみな動き</u>) を高めていきたい。 高めたい体力の内容 (いくつでもよい)	リンボーダンスが苦手だ 理由 (いくつでもよい) () から (<u>体のせわらかさ</u>) を高めていきたい。 高めたい体力の内容 (いくつでもよい)

また、学習後に書かせた感想の中に自分の体力について、「自分の体力が、平均より低い項目が多いことがわかった」や「全国平均と比べて、得意なものと苦手なものの差があった。」「苦手なものが多いことに気付いた。」等、自分の体力について、把握することができた感想が多く見られた。

以上のことから「気付く・見通す」段階で、「気付く活動」を位置付けたことやレーダーチャートの活用によって思考・判断の目指す子どもの姿について到達したと考える。

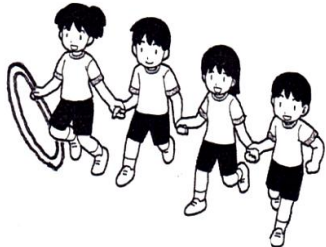
3 「とりくむ」段階（第3～5時）

(1) 目指す子どもの姿

- | | |
|--|------------|
| ○仲間とかかわり合いながら声をかけ合って運動することができる。 | (関心・意欲・態度) |
| ○体力を高める運動について、ねらいに合った動きを理解し、その動きを実践することができる。 | (技能) |

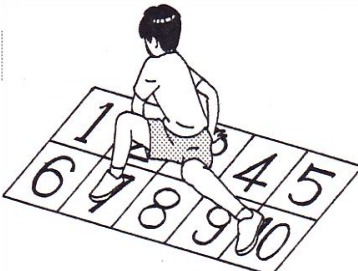
(2) 手だて

○子どもの実態や体づくり運動の特性に即した教材化の工夫（※第3時に取り扱った教材）

【運動名】(運動の種類)	【輪通しゲーム】(体ほぐしの運動)	
運動の行い方	各グループで1列に並んで手をつなぎ、手を離さずに輪をはしまで送る。	
【価値性】	仲間と交流する。	
【発展性】	輪の大きさを変えて発展させる。	
【プレイ性】	各グループで速さを競い合う「競争」の楽しさを味わう。	
【協同性】	仲間と手をつなぎながらグループ間で競い合っ て輪を送る。	

【運動名】(運動の種類)	【前屈ボール運び】(体の柔らかさを高めるための運動)	
運動の行い方	前屈をした状態で一方に入った10個のボールをもう一方のバケツに移す。	
【価値性】	もも裏の柔軟性を高める。	
【発展性】	台の高さを変えて発展させる。	
【プレイ性】	目指す台の高さでの「達成」の楽しさを味わう。	
【協同性】	仲間に移動したボールを数えてもらいながら運 動する。	

【運動名】(運動の種類)	【リンボーダンス】(体の柔らかさを高めるための運動) ※P16 参照
--------------	------------------------------------

【運動名】(運動の種類)	【ナンバータッチ】(体の柔らかさを高めるための運動)	
運動の行い方	仲間に指示された番号に右手→左手→右足→左足の順に手足を置いていく。	
【価値性】	背・尻の柔軟性を高める。	
【発展性】	番号の札を移動させて発展させることができる。	
【プレイ性】	仲間の指示通りの番号に手足を置くことができ る「達成」の楽しさを味わう。	
【協同性】	仲間に番号を指示してもらいながら運動を行う。	

○運動をつくり変える活動を位置付けた活動構成の工夫（理解する活動）

【動きの相互評価】

○運動をつくり変える活動を活発にする具体的支援の工夫

【運動を把握するための資料】

【ステップアップ評価ノート】

(3) 授業展開

「とりくむ」段階では、ねらいに応じた体力を高める運動について理解し、仲間とかかわり合いながら体力を高める運動に取り組むための活動を行った。

学習活動 (◆) 教師の支援 (◇)	子どもの姿 (抽出児A児B児C児の姿を中心に)
(第3時) ◆体ほぐしの運動をして心と体のスイッチをオンにする。 手だて 教材化の工夫 【輪通しゲーム】 ◇本時主運動につながる体ほぐしの運動を体験させる。 ◆「体の柔らかさ」の必要性について考える。 「本時のめあて」 ～体の柔らかさを高めるための運動について知り、取り組んでみよう～ ◆体の柔らかさを高めるための運動について知る。	子どもの姿 (抽出児A児B児C児の姿を中心に) 【写真7：体ほぐしの運動「輪通しゲーム」を行うA児の様相】  体を曲げたら すばやく通れるよ！ ・抽出児が書いた「体の柔らかさ」の必要性について A児 けがや故障をしにくくなるため B児 けがをしなかったり、パワフルな動きができるようになるため C児 こっせつしにくくなる。
手だて 教材化の工夫 ～体の柔らかさ～ 【前屈ボール運び】 【リンボーダンス】 【ナンバータッチ】	【写真8：体の柔らかさを高めるための運動の説明を聞く抽出児】  動き方がわかったぞ  私にもできるかな A児の様相 B児の様相
手だて 【運動を把握するための資料】  前屈ボール運び 【運動のねらい】 ～ももの後ろを広げる～ 動き方の 台の上ののって、前屈をする。 動き方の ひざを曲げないようにして、こしから曲げる。 動き方の そのままバケツの中にあるボールをもう一方のバケツにはこぶ。	【写真9：体の柔らかさを高める運動を行う抽出児】 「ナンバータッチ」 「リンボーダンス」 「前屈ボール運び」  A児の様相  B児の様相  C児の様相
◆体の柔らかさを高めるための運動に取り組む。 手だて 【動きの相互評価】 ◇協力場面が生まれるようにグループで運動に取り組ませる。 ◇資料やノートをもとに互いの動きを評価させ、動きを理解させる。	【写真10：仲間の動きを評価する抽出児】  背を曲げて！  ひざを曲げないようにね  A児の様相 B児の様相 C児の様相

手だて
【ステップアップ評価ノート】

「前屈ボール運び」～ももの後ろを伸ばす～
仲間からのアドバイス（アドバイスをくれた人の名前）

動き方	動き方が わかったか			動きが できるようになったか		
	よく わかった	少しは わかった	わからない	できた	少し できた	できない
①台の上ののって、前屈をする。						
②ひざを曲げないようにして、こしから曲げる。						
③そのままバケツの中にあるボールをもう一方のバケツにはこぶ。						

◇運動後すぐに、ふり返しを行わせ、運動についての理解と達成度について確認をさせる。

◇音楽をかけ、楽しい雰囲気作りを行う。

◇動きの高まりや達成の喜びを共有することをルール化する。
（ハイタッチや拍手など）

◆本時の学習をふり返し、「体の柔らかさ」を高めるための動きについてのまとめをする。

◇本時学んだことを日常に生かすことを提案する。

【資料6：ステップアップ評価ノートの抽出児の記述】

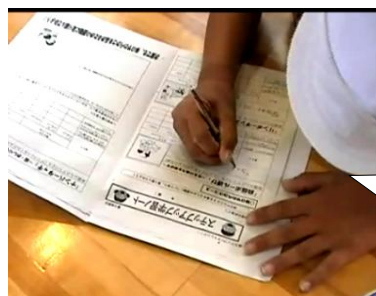
動き方	動き方が わかったか			動きが できるようになったか		
	よく わかった	少しは わかった	わからない	できた	少し できた	できない
①台の上ののって、前屈をする。	○			○		
②ひざを曲げないようにして、こしから曲げる。	○			○		
③そのままバケツの中にあるボールをもう一方のバケツにはこぶ。	○			○		

A児の記述

動き方	動き方が わかったか			動きが できるようになったか		
	よく わかった	少しは わかった	わからない	できた	少し できた	できない
①ラインの上に立ちボールを上に投げ上げる。	○			○		
②投げ上げたボールが落ちてくる間に仲間へパスされたボールを仲間にもどす。	○					○
③ライン上を移動しながら自分で投げ上げたボールを受け取る。	○					○

C児の記述

【写真11：ふり返しを行う様相】



やったー！2つ目の運動もできたぞ！次は、どんな運動かな

【写真12：まとめをする抽出児】



体を曲げたり、伸ばしたりすれば体の柔らかさは、高まるんだあ

B児の様相

（4）考察

①関心・意欲・態度について

「とりくむ」段階で【輪通しゲーム】【前屈ボール運び】【リンボーダンス】【ナンバータッチ】や【動きの相互評価】を行ったことで子どもたちは、仲間とかかわり合いながら声をかけ合って運動することができたと考える。

その根拠として【グラフ7】にあるように第3時の形成的授業評価の因子「協力」における項

目8（友だちと協力して、仲良く学習できましたか。）に対して、97%の子どもが「はい」と答えていることや、項目9（ともだちとおたがいに教えたり、協力したりできましたか。）では、87%の子どもが「はい」と答えていることが挙げられる。また、【写真13】の様相からも子どもたちが、助け合ったり、協力し合ったりしながら仲良く運動に取り組んでいることがわかる。

また、学習ノートの記述からもたくさんの子どもが、互いの動きについて【資料7】のようなアド

バイスや励ましの言葉をかけ合いながら運動することができたことが見とることができる。ねらいに応じた運動について、資料や学習ノートを参考にしながら相互評価し合う中でたくさんの助け合いや協力場面が生まれていた。また、達成できたときには、ハイタッチや拍手などをして互いに喜びを共有することができていた。

【資料7：仲間からのアドバイスや励まし】

「前屈ボール運び」～ももの後ろを伸ばす～ 仲間からのアドバイス（アドバイスをくれた人の名前） ひざをまげな（もも）いとう おかまつ	
「リンボーダンス」～背を曲げる～ 仲間からのアドバイス（アドバイスをくれた人の名前） ちびさこしむね（もろ）	
「二人なわとび」～人の動きに合わせてタイミングよく動く～ 仲間からのアドバイス（アドバイスをくれた人の名前） （りゅう） 2人のうごきあはてる	
「ナンバータッチ」～背・おしりを伸ばす～ 仲間からのアドバイス（アドバイスをくれた人の名前） かん（おれ）あまつ	

以上のことから、「とりくむ」段階で、の教材化の工夫や「理解する活動」を位置付けたことによって関心・意欲・態度の目指す子どもの姿について到達したと考える。

②技能について

「とりくむ」段階で【前屈ボール運び】【リンボーダンス】【ナンバータッチ】などの運動や【動きの相互評価】【ねらいに応じた運動を把握するための資料】【ステップアップ評価ノート】の活用を行うことによって、子どもたちは、体力を高める運動について、ねらいに合った動きを理解し、その動きを実践することができたと考える。

その根拠として、まず【グラフ8】にあるように第3時の形成的授業評価「成果」因子の質問項目2（今までできなかったことができるようになりましたか。）において77%の子どもが「はい」と答えていることや、質問項目3（「あっわかった！」とか「あっそうか！」と思った

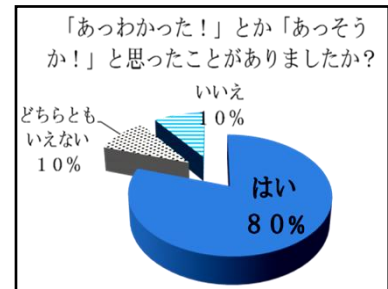
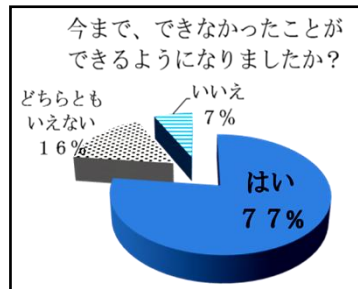
ことがありましたか。) においては、80%の子どもが「はい」と答えていることが挙げられる。中には【写真14】にあるように、達成の喜びをハイタッチや拍手などをして共有している様子も見られた。

次に、学習ノートのふり返しを見ると、動きの理解については、【グラフ9】にあるように第3時の「体の柔らかさ」第4時の「巧みな動き」第5時の「力強い動き」を高めるための運動すべてにおいて100%の子どもが「よくわかった」と

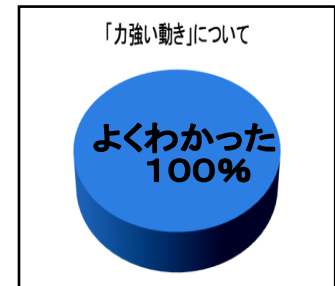
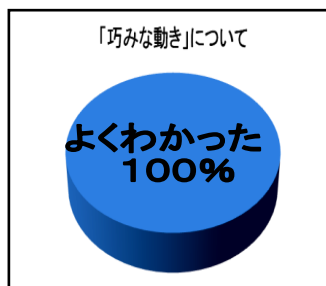
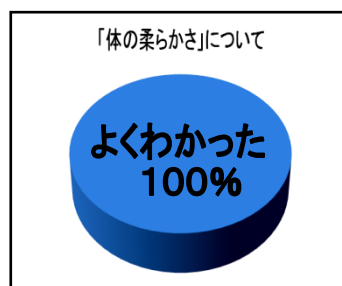
評価している。このことは、子どもたちが、ねらいに応じた運動の動き方について理解できたことを示していると考ええる。

また、【グラフ10】にあるように運動についての達成度においては、第3時の「体の柔らかさ」では97%の子どもが「できた」と評価している。第4時の「巧みな動き」では84%の子どもが、第5時の「力強い動き」では97%の子どもが「できた」と評価している。このことは、ねらいに応じた動きを理解した上で、正しく実践できたことを示していると考ええる。これらのデータからも体力を高めるための運動について、多くの子どもが理解し、実践できたと考えられる。

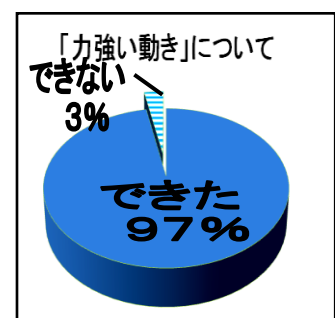
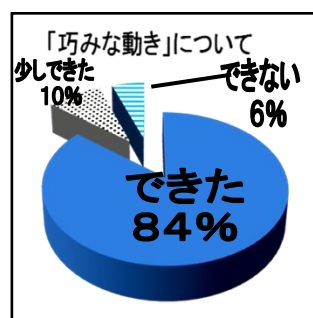
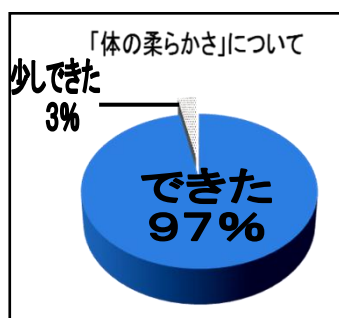
【グラフ8： 形成的授業評価「成果」因子の質問に対して】



【グラフ9： 運動についての理解度】



【グラフ10： 運動についての達成度】



また、3名の抽出児について、「体の柔らかさ」を高めるための運動の動きを分析した結果、【写真15】に示すようにねらいに応じた動きを実践することができていた。他の子どもについても、ねらいと正しい動きについて、正しく理解した運動を実践することができていた。

【写真15：ねらいに応じた運動を行う抽出児】



以上のことから、「とりくむ」段階において、教材化の工夫や「理解する活動」、資料や学習ノートの活用によって子どもたちは、技能の目指す子どもの姿について到達したと考える。

3 「いかす」段階（第6・7時）

（1）目指す子どもの姿

○体力を高める運動を自己の体力に応じた難易度の運動につくり変えることができる。（思考・判断）

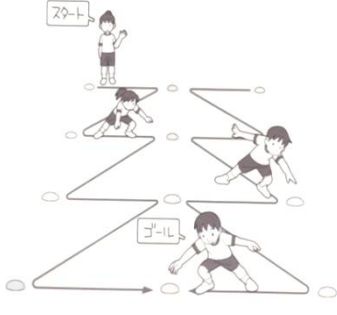
（2）手だて

○子どもの実態や体づくり運動の特性に即した教材化の工夫（※第7時に取り扱った教材）

【運動名】(運動の種類)	【風船パスゲーム】(体ほぐしの運動)	
運動の行い方	各グループで手をつなぎ、輪になった状態で風船を落とさないように頭や足を使って風船をパスし合う。	
【価値性】	仲間と交流する。	
【発展性】	風船を増やして発展させることができる。	
【プレイ性】	風船をパスし続ける時間をグループ間で競い合う「競争」の楽しさを味わうことができる。	
【協同性】	仲間と手をつなぎながら風船をパスし合う運動をする。	

【運動名】(運動の種類)	【前屈ボール運び】(体の柔らかさを高めるための運動) ※P21 参照
【運動名】(運動の種類)	【リンボーダンス】(体の柔らかさを高めるための運動) ※P16 参照
【運動名】(運動の種類)	【ナンバータッチ】(体の柔らかさを高めるための運動) ※P21 参照

【運動名】(運動の種類)	【二人なわ跳び】(巧みな動きを高めるための運動) ※P9 参照
【運動名】(運動の種類)	【前転キャッチ】(巧みな動きを高めるための運動) ※P17 参照

【運動名】(運動の種類)	【コーンタッチ】(巧みな動きを高めるための運動)	
運動の行い方	等間隔に並べられた小さなコーンにジグザグに触れながら、10 秒以内にゴール地点までたどり着くようにする。	
【価値性】	リズムカルに素早く動く能力を高める。	
【発展性】	コーンの距離を変えて発展させることができる。	
【プレイ性】	10 秒内にゴールにたどり着く「達成」の楽しさを味わうことができる。	
【協同性】	仲間にタイムを測定してもらう補助を受けながら運動する。	

【運動名】(運動の種類)	【かごや】(力強い動きを高めるための運動) ※P9 参照
【運動名】(運動の種類)	【手押し車】(力強い動きを高めるための運動) ※P17 参照

【運動名】(運動の種類)	【マット運び】(力強い動きを高めるための運動)	
運動の行い方	丸めたマットを3人で持ち上げて運ぶ。	
【価値性】	腕の筋力を高めることができる。	
【発展性】	マットを運ぶ距離を変えて発展させることができる。	
【プレイ性】	目標とする距離をマットを落とさずに運ぶ「達成」の楽しさを味わうことができる。	
【協同性】	仲間と一緒にマットを運ぶ運動をする。	

○運動をつくり変える活動を位置付けた活動構成の工夫（つくり変える活動）

【運動体験をもとにした自己評価・相互評価】

○運動をつくり変える活動を活発にする具体的支援の工夫

【自己の体力に応じた運動を把握する資料】

(3) 授業展開

「いかす」段階では、自己の体力に応じた体力を高める運動を選び、仲間と工夫して体力を高める運動に取り組むための活動を行った。

（第7時）

- ◆体ほぐしの運動を行い、心と体のスイッチをオンにする。

**手だて 教材化の工夫
【風船パスゲーム】**

- ◇ルール of 工夫について考えさせながら行うことで本時の活動につなげる。

「本時のめあて」

～自分のレベルに合うように工夫して運動に取り組もう！～

- ◆運動をつくり変える視点について確認をする。

- ◇運動が易しすぎる時→
難しくつくり変える。
運動がちょうどいい時→
そのまま取り組む。
運動が難しすぎる時→
易しくつくり変える。
ことを指示し、根拠を持ってつくり変えることを確認する。

- ◆自分の課題に合った運動を選んで取り組む。
- ◇「きづく・見通す」段階でためあての運動に優先的に取り組ませる。
- ◇グループを解体し、個人の課題に合った運動に取り組ませる。

- ◆自分に合う難易度の運動につくり変えて取り組む。

**手だて 教材化の工夫
～体の柔らかさ～
【前屈ボール運び】
【リンボーダンス】
【ナンバータッチ】**

**～巧みな動き～
【二人なわ跳び】
【前転キャッチ】
【コーンタッチ】**

**～力強い動き～
【かごや】
【手押し車】
【マット運び】**



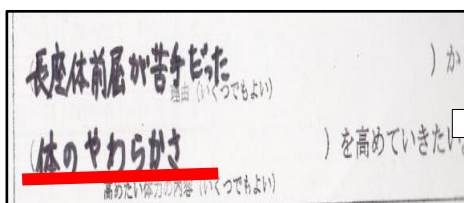
【写真16：体ほぐしの運動「風船パスゲーム」に風船の数を増やして取り組む様相】

風船の数を増やすと
少し難しくなるね！



【写真17：運動をつくり変える視点を確認する様相】

なるほど・・・
そうすれば、運動を
難しくしたり簡単に
したりできるんだ！



A児の立てためあて

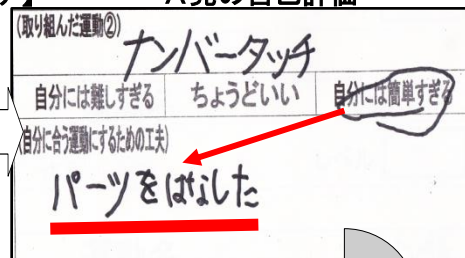


【写真18：めあてに合う運動に取り組むA児の様相】

【写真19：自己の体力に合う運動につくり変えて取り組むA児】

A児【ナンバータッチ】

A児の自己評価



ぼくには
簡単すぎるなあ

・運動を難しくつくり
変えて取り組むA児



手だて
【運動体験をもとにした自己
評価・相互評価】

◇子どもが、発想豊かに運動のつくり変えができるように様々な用具を準備しておく。

手だて
【自己の体力に応じた運動を
把握する資料】

「前屈ボール運び」～ボール10個の移動でクリア～

○レベルを変える視点

→ 台の「高さ」
→ 運ぶ「ボールの種類」



◇音楽をかけ、楽しい雰囲気作りを行う。

- ◆自分の体力に合った運動のつくり換え方の交流をする。

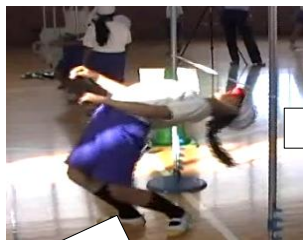
◇体力を高めるためには、自分に合ったレベルの運動を続けていくことが大切であることを伝える。

- ◆体力を高める運動に取り組んだ感想を書く。

◇感想を交流し、運動の価値を広げ、運動の日常化につなげる。

【写真 20: 自己の体力に合う運動につくり変えて取り組むB・C児】

B児【リンボーダンス】



わたしには
簡単すぎるなあ

- ・運動を難しくつくり
変えて取り組むB児

B児の自己評価

リンボーダンス

自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる
-----------	--------	-----------

自分に合う運動にするための工夫

でも×にして、リを変えた。



C児【前転キャッチ】



ぼくには
難しすぎるなあ

- ・運動を易しくつくり
変えて取り組むC児

C児の自己評価

(取り組んだ運動④)

前々々々々		
自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる

自分に向運動にする(の工夫)

球をとりかえる



【写真 21：つくり変え方の交流の様相】



「二人なわ跳び」を
2重跳びにして難易
度を上げたのかあ

・抽出児の感想

A児 色々な運動をして、もっともっとほねをじょうぶにしたり
パワフルな走りができたり、ころんでも軽いけがですむよ
うな体をつくってみたいです。

B児 とても楽しかったです。手押し車とか前転キヤッチが好き
でした。もっとやりたかったです。

C児 体育っておもしろいなあーと思いました。体力もちょっと高められたし、ひさしぶりにたのしいと思いました。

(4) 考察

①思考・判断について

「いかす」段階で、子どもたちは、【前屈ボール運び】【リンボーダンス】【ナンバータッチ】【二人なわ跳び】【前転キャッチ】【コーンタッチ】【かごや】【手押し車】【マット運び】などの運動や【運動体験をもとにした自己評価・相互評価】、【自己の体力に応じた運動を把握するための資料】の活用によって、体力を高める運動を自己の体力に応じた難易度の運動につくり変えることができたと考える。

その根拠として、学習ノートの記述から、【資料8】にあるように運動体験の自己評価をもとに難易度を変えるための工夫を行っている様子が見とれることが挙げられる。子どもたちは、運動を体験したあと、「自分には難しすぎる」と感じた場合、運動の難易度を下げるつくり変えを行い、「ちょうどいい」と感じた場合は、運動を変えず取り組み、「自分には簡単すぎる」と感じた場合は、運動の難易度を上げるつくり変えを行っている。

【資料8：自己の体力に応じた運動のつくり変え】

(取り組んだ運動①) 前屈ボール運び <table border="1"> <tr> <td>自分には難しすぎる</td> <td>ちょうどいい</td> <td>自分には簡単すぎる</td> </tr> </table> (自分に合う運動にするための工夫) 台も付けて ボールを小さくした。	自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる	(取り組んだ運動②) 二人なわとび <table border="1"> <tr> <td>自分には難しすぎる</td> <td>ちょうどいい</td> <td>自分には簡単すぎる</td> </tr> </table> (自分に合う運動にするための工夫) とびかけたなごきとびに 三人でとび あやとび	自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる
自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる					
自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる					
(取り組んだ運動④) 手おしぐるま <table border="1"> <tr> <td>自分には難しすぎる</td> <td>ちょうどいい</td> <td>自分には簡単すぎる</td> </tr> </table> (自分に合う運動にするための工夫) きょろを短くした。	自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる	(取り組んだ運動③) リンボーダンス <table border="1"> <tr> <td>自分には難しすぎる</td> <td>ちょうどいい</td> <td>自分には簡単すぎる</td> </tr> </table> (自分に合う運動にするための工夫) 85cmまで下げた。	自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる
自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる					
自分には難しすぎる	ちょうどいい	自分には簡単すぎる					

このように、学習ノートの記述から自己の体力に応じた難易度の運動につくり変えて取り組むことができていた子どもが97%いた。これらのことから、子どもたちが、自分の体力に合うように運動を工夫して取り組むことができたことがわかる。子どもたちは、【写真22】のようにたくさんのアイデアで運動をつくり変え、積極的に運動に取り組んでいた。

【写真22：自己の体力に応じた難易度の運動につくり変える様相】



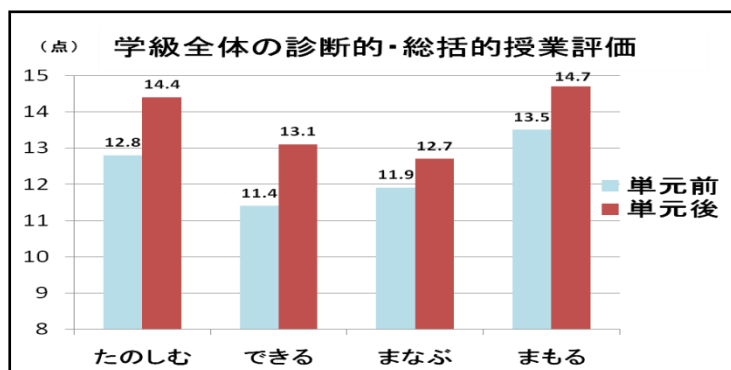
【リンボーダンスのつくり変え】【コーンタッチのつくり変え】【ナンバータッチのつくり変え】

以上のことから、「いかす」段階で、教材化の工夫や「つくり変える活動」、資料の活用によって思考・判断の目指す子どもの姿について到達したと考える。

5 事後調査

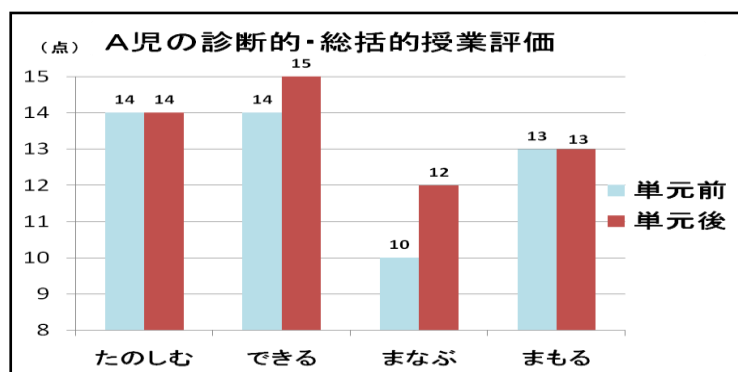
(1) 診断的授業評価と総括的授業評価の比較

単元前と単元後において、体育の授業に関する調査を行い、子どもたちの体育科授業についての「たのしむ」「できる」「まなぶ」「まもる」因子における意識の変化について比較した。



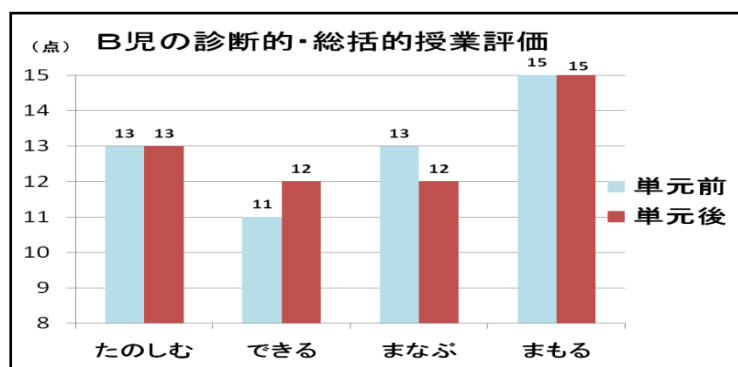
【学級全体として】

全ての因子の得点が伸びている。
特に「できる」と「たのしむ」因子の伸びが大きく、本単元における運動体験の中で、本主題に関わる体を動かす楽しさや心地よさを味わえた子どもが多かったことがうかがえる。



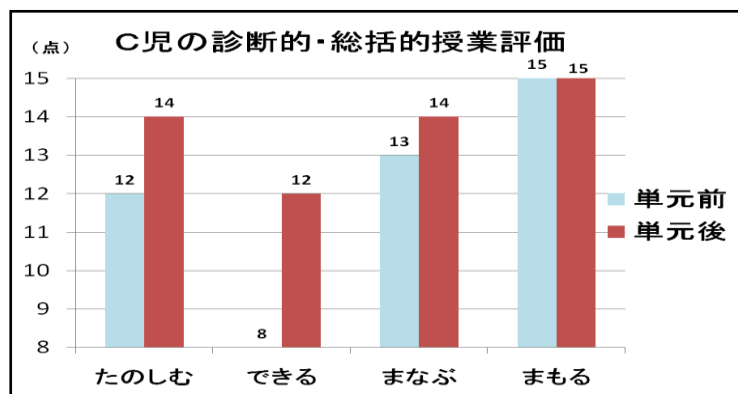
【A児】

「できる」「まなぶ」因子の得点が伸びている。
もともと運動が好きなA児においても、本単元にて運動における達成感や体を動かす楽しさを感じながら活動することができたようだ。もともと低かった「まなぶ」因子が12ポイントまで伸びており、楽しいだけでなく学びの多い学習であったととらえることができている。



【B児】

「できる」因子が伸びているのに対して、「まなぶ」因子が下がっている。
「できる」因子の伸びから、特別な技能を必要としない本単元において、運動ができたことへの達成感を感じることができたようだ。単元を通して、仲間と協力して楽しく活動することができていた。

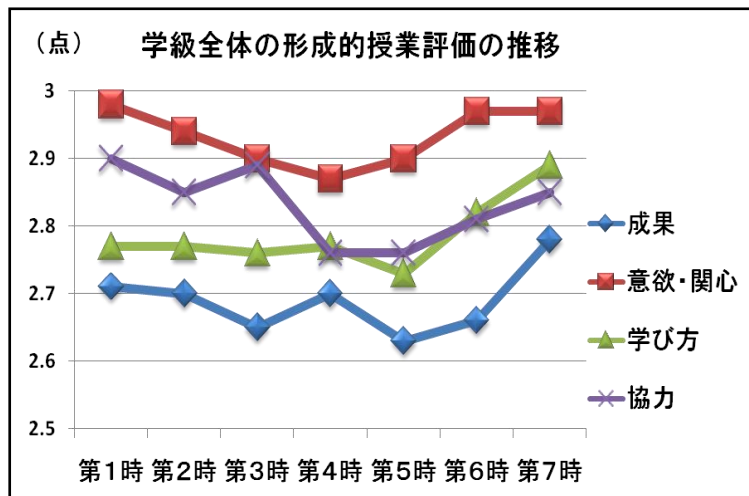


【C児】

「たのしむ」「できる」「まなぶ」因子がそれぞれ伸びている。
特に「たのしむ」「できる」因子の伸びが大きく、本単元において体を動かすことへの有能感とそのことによる楽しさや喜びを感じることができたようだ。自分に合った運動に取り組むことが、楽しさにつながったようで感想の中にも久しぶりに体育を楽しめたことが示されていた。

(2) 形成的授業評価の推移

単元における毎授業後に、体育授業についての調査を行い、学級全体の体育授業の「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」因子における意識の変化を見た。



【学級全体の傾向】

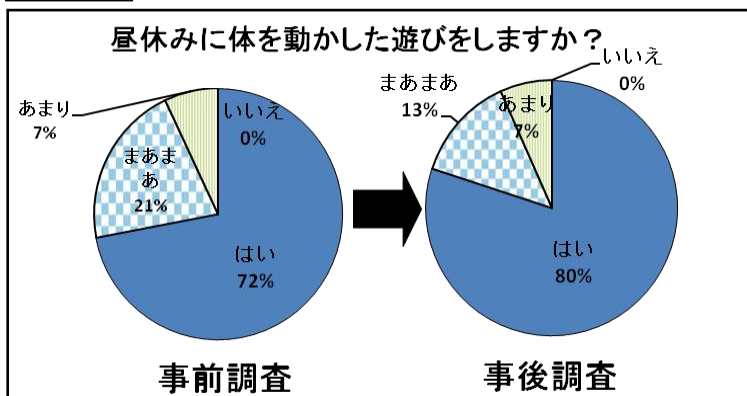
全体的な傾向として、各因子とも非常に高得点であった第1時よりゆるやかに下降し、単元終盤にかけて、再び上昇している。第1時が高かった原因として考えられることは、単元はじめに、関心・意欲を高めるための体ほぐしの運動をメインとした時間を設けたことによるものではないかと考える。第4・5時の得点が低い原因として、「巧みな動き」「力強い動き」を高めるための運動の内容が多少困難であったことが考えられる。しかし、単元を通して、各因子が高得点で推移しており、一定の授業の成果が得られたと見ることができる。

(3) 運動習慣に関する調査

① 学校生活における体を動かした遊びについて

事前調査において実施した、学校生活における体を動かした遊びについての実態を把握するためのアンケートを事後にも実施し、その変化を比較した。

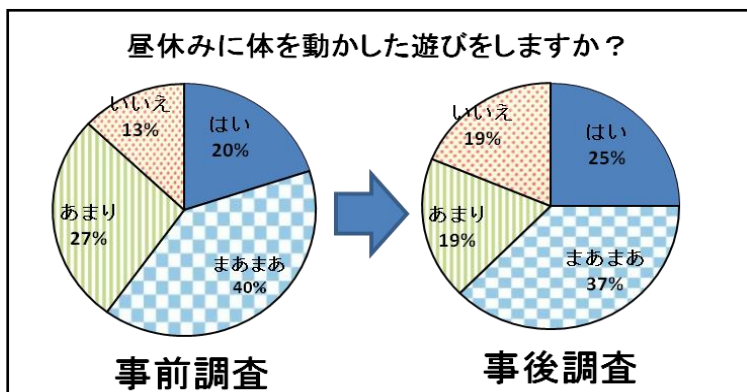
男子



【男子の傾向】

80%が「はい」、13%が「まあまあ」と答えており、外で遊ぶ子どもが増えたことがうかがえる。もともと外で体を動かして遊ぶ子どもが多かった男子であるが、さらに本単元をきっかけに体を動かした遊びを行う子どもが増えた。単元の終末では、体力を高める運動を昼休みに取り組んだという子どもも増えており、運動や体力への関心が高まったことがうかがえる。

女子

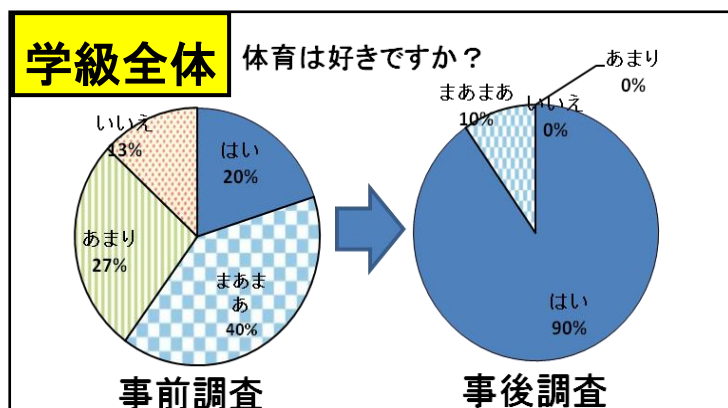


【女子の傾向】

25%が「はい」、37%が「まあまあ」と答えており、多少体を動かして遊ぶ子どもが増えたものの依然として実態は厳しい。事前調査で「いいえ」と答えた子どもが、本単元の学習後も減少しなかった。男子と一緒に外で元気に遊ぶ子どもと、室内で本を読んだり、友だちとおしゃべりをして遊んだりする子どもの二極化が進んでいるようで、継続した指導の必要性を感じる。

②「体育が好きか」について

事前調査において実施した、体育が好きかについての実態を把握するためのアンケートを事後にも実施し、その変化を比較した。



【学級全体の傾向】

学級全体として、単元終了後に「体育が好きですか？」の質問に「はい」と答えた子どもが大幅に増えた。さらに「あまり」や「いいえ」と答えた子どもが0人となり、学習を通して、多くの子どもが体を動かす楽しさや心地よさを味わうことができたことがうかがえる。単元最後に書かせた感想の中にも、「体育が好きになった」という言葉が多く見られ、体育についての意欲の高まりを感じることができた。

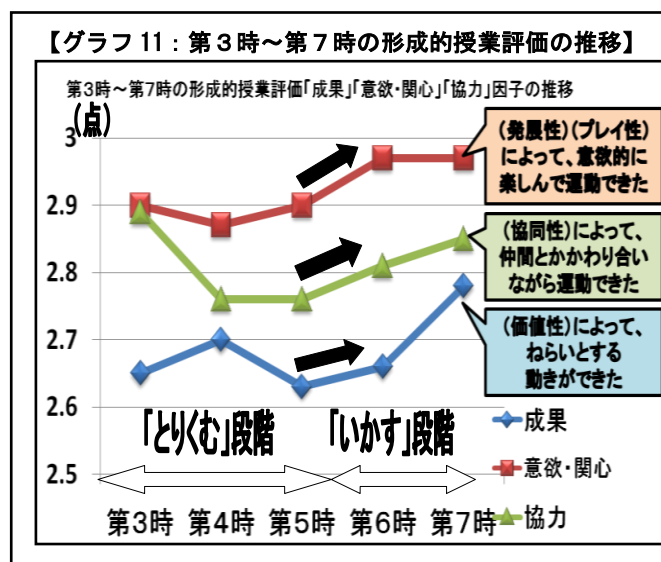
Ⅶ 全体考察

1 子どもの実態や体づくり運動の特性に即した教材化の工夫

本単元における体力を高める運動の教材における「価値性」の要素によって、ねらいに合った動きを身に付けることができ、「発展性」や「プレイ性」の要素によって精一杯体を動かしながら、楽しんで運動に取り組むことができ、「協同性」の要素によって仲間と協力しながら、互いに声をかけ合って運動することができたと考える。その根拠として、これらの要素を持つ運動に取り組んだ第3時～第7時における形成的授業評価の結果をみると【グラフ11】のように「成果」「関心・意欲」「協力」の因子すべてが、高得点で推移していることが挙げられる。このことは、子どもが教材を通して、動きを身に付け、仲間と協力しながら楽しんで活動できていることを示している。

加えて、「とりくむ」段階から「いかす」段階に移る第5時から第6時にかけて各因子の得点が上がっている。これは、段階が変わって、運動を自己の体力に応じて作り変えて取り組み始めたことによる教材の「発展性」の要素から生まれたものであると考える。自己のレベルに合う運動に取り組むことが、運動の楽しさや心地よさを大きくしたと考える。

また、子どもたちの体力を高める運動について「気付く・見通す」段階と「いかす」段階の動きを比べると【写真23】にあるように高まっていることがわかる。子どもたちは、単元を通して、運動に夢中になって取り組み、どんどんレベルの高い運動に挑戦することができていた。このことは、子どもたちにとって、教材が魅力的であり、取り組む価値のある運動であったからであると考えられる。



【写真 23：動きが高まった抽出児】

「気付く・見通す」段階のA児



「手押し車」で途中で肘を着いてしまう。

「気付く・見通す」段階のB児



「前転ボールキャッチ」でボールが取れない。

「気付く・見通す」段階のC児



「前屈ボール運び」で膝が曲がっている。

「いかす」段階のA児



「手押し車」で長い距離を進むことができた。

「いかす」段階のB児



「前転キャッチ」でうまくボールをキャッチできた。

「いかす」段階のC児



「前屈ボール運び」で膝を伸ばして、台の高さを発展させて運動できた。

さらに、単元終了後の子どもの感想には、【資料9】のように「発展性」による自分のレベルに合った運動を評価した記述や「協同性」による仲間と協力できて楽しかったことなどの感想が多く見られた。

【資料9：単元終了後の子どもの感想】

○体力を高める運動に取り組んだ感想

山田先生とやる運動は、レベルがあるから、とて やりやすかったです。レベルに合った物をかいたので、とてもやりやすかったです。楽しかったです。楽しかったです。

「発展性」に関する記述

○体力を高める運動に取り組んだ感想

自分にあうめあてで取り組んだり、苦手のものがあったり。出来なかった事が少しずつできるようになったり 楽しく、チームで協力してできました。

「協同性」に関する記述

以上のことから、子どもの実態や体づくり運動の特性に即した教材化の工夫は、本研究における目指す子どもの姿への到達に有効であることがわかった。

2 運動をつくり変える活動を位置付けた活動構成の工夫

(1)「気付く活動」について（体力テスト結果の検討・試しの運動体験）

「気付く・見通す」段階において、自己の体力の実態を把握し、今後の学習についての課題と見通しを持つために「気付く活動」を位置付けた。体力テストの結果を検討したり、試しの運動体験をしたりすることで本単元に取り組む必要性について実感し、意欲を持って学習に臨むことができたと考える。

その根拠として、【資料10】にあるように、学習ノートの記述に試しの運動体験からの気づきが見られたことが挙げられる。この気づきをもとにして、子どもたちは、個人のめあてをたてることができていた。

【資料10：試しの運動体験から自己の課題に気付いたC児の記述】



体力の内容	運動名	運動をした感じ
体のやわらかさ	リンボーダンス	苦手と感じた ● ふつうと感じた ● 得意と感じた ●
たくみな動き	前転キャッチ	苦手と感じた ● ふつうと感じた ● 得意と感じた ●
力強い動き	手押し車	苦手と感じた ● ふつうと感じた ● 得意と感じた ●

また、学習ノートにおける活動のふり返りに、【資料11】のような自分の体力についての気づきについての記入が多く見られた。

【資料11：自分の体力についての記述】

○自分の体力について ぼくは苦手なものが多いけど握力が強いから握力をみにする。	○自分の体力について 自分の体力が平均より低い所が多いということ がわかりました。でも平均より高いところも あったのでうれしかったです。
---	--

(2)「理解する活動」について（動きの相互評価）

「とりくむ」段階において、ねらいに応じた体力を高める運動について理解し、仲間とかかわり合いながら体力を高める運動に取り組むために「理解する活動」を位置付けた。グループ内で動きの相互評価を行うことで体力を高める運動を身に付け、仲間と協力しながら運動に取り組むことができたと考える。

その根拠として、学習ノートにおける活動のふり返りに【資料12】のような体力を高めるための動き方の記述が見られたことが挙げられる。これらの活動を通して、ねらいに応じた体力を高めるための運動について理解し、仲間と一緒に運動に取り組むことにつながった。

【資料12：体力を高めるための動き方についての記述】

○力強い動きを高めるための運動に取り組んで どれも、むずかしかったけど、<u>動き方もよくわかって、重たさでもできたのでよかったです。</u>	○体のやわらかさを高めるための運動に取り組んで 曲げたり、のびたり、ねじったり するのいいと分かった。
---	---

(3)「つくり変える活動」について（運動体験による自己評価・相互評価）

「いかす」段階において、自己の体力に応じて運動を選び、仲間と工夫して体力を高める運動に取り組むために「つくり変える活動」を位置付けた。運動体験をもとに自分の体力に合っているかを自己評価することを通して、自分の体力に合った難易度の運動につくり変え、工夫して運動に取り組むことができたと考える。

【写真 24】にあるように自分に合う難易度の運動につくり変えながら運動に取り組むことは、子どもの運動に対する意欲を高め、夢中になって楽しんで取り組むことにつながったと考える。

また、学習ノートにおける活動のふり返りに【資料 13】のような自己の体力に合う難易度の運動へつくり変えて取り組んだことで動きが高まったことや、楽しかったことなどの記述が見られた。

このように「気付く活動」と「理解する活動」、「つくり変える活動」が、各段階のねらいを達成することにつながり、このことによって、子どもが自分の課題について気付き、正しい行い方で体力を高める運動に工夫して取り組むことができたと考える。このことによって、子どもたちは、運動にのびのびと楽しんで取り組むことができていた。

以上のことから、運動をつくり変える活動を位置付けた活動構成の工夫は、本研究における目指す子どもの姿への到達に有効であることがわかった。

【写真 24：「ナンバータッチ」をつくり変えて取り組む A 児】



「数字パネル」をつないで



「数字パネル」を離して

【資料 13：運動のつくり変えに関する記述】

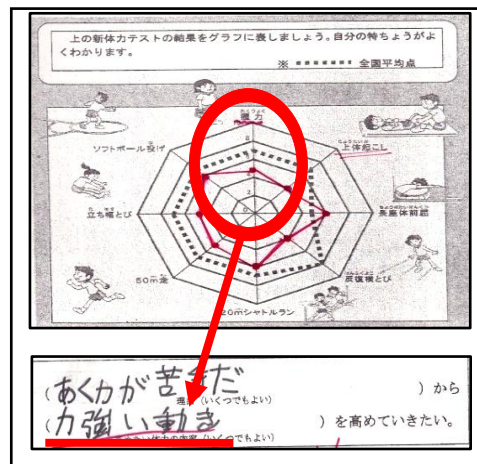
7時間ほど楽しかったです。私は体力が低く、体を高めるために、体力が低く、
時間が経つと練習して、球も、自分で考えて、どうでもいい、
自分の体力を高めたい。強い動きは、動かないで、遅い動きは、
私は、これは、すべてできるように、なりました。

3 運動をつくり変える活動を活発にする具体的支援の工夫

(1) 自己の体力テスト結果について検討するためのレーダーチャートについて

「気付く活動」の支援として、レーダーチャートを【資料 14：レーダーチャートからのめあて】

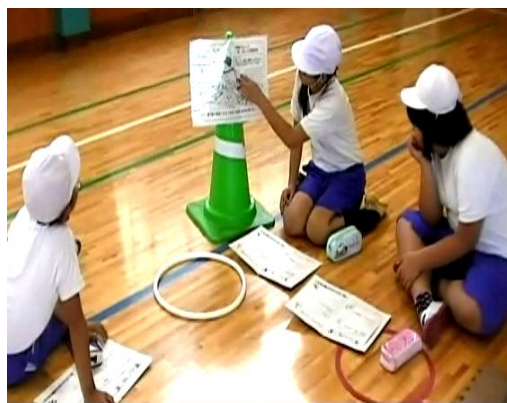
使って、自己の体力について把握させた。新体力テストの数値だけでは、見えてこない課題をレーダーチャート化することで視覚的に自分の体力について、把握することができ、さらに全国平均値と比較することによって自分の課題が明確になり、【資料 14】のような自己の課題に応じためあてを立てることにつながったと考えられる。子どもたちは、このレーダーチャートの結果を見ながらめあてを立てていた。子どもたちは、初めて経験するレーダーチャート化の作業にとても楽しそうに取り組んでいた。



(2) ねらいに応じた運動を把握するための資料

「理解する活動」の支援として、ねらいに応じた運動を把握するための資料を使って、互いの動きを相互評価させた。資料は、各コーナーのコーンに貼り付けておいた。子どもたちは、動き方について資料を使って確認し、仲間にアドバイスをおくっていた。また、運動する時に、動き方がわからない児童は、資料を自分で確認してから自信を持ってのびのびと運動に取り組んでいた。

【写真 25：資料で動きを確認する様相】



(3) 運動を評価するためのステップアップ評価ノート

「理解する活動」の支援として、自己の運動について、ねらいに応じた動きが理解できたか、実践できたかの視点でステップアップ評価ノートに記録させた。自分の運動について振り返ることで、動きの理解や達成につなげていた。また、仲間からのアドバイスや明確になった課題も記録することができていた。これらの作業を通してほとんどの子どもが動きを理解し、動きを身に付けることができていた。

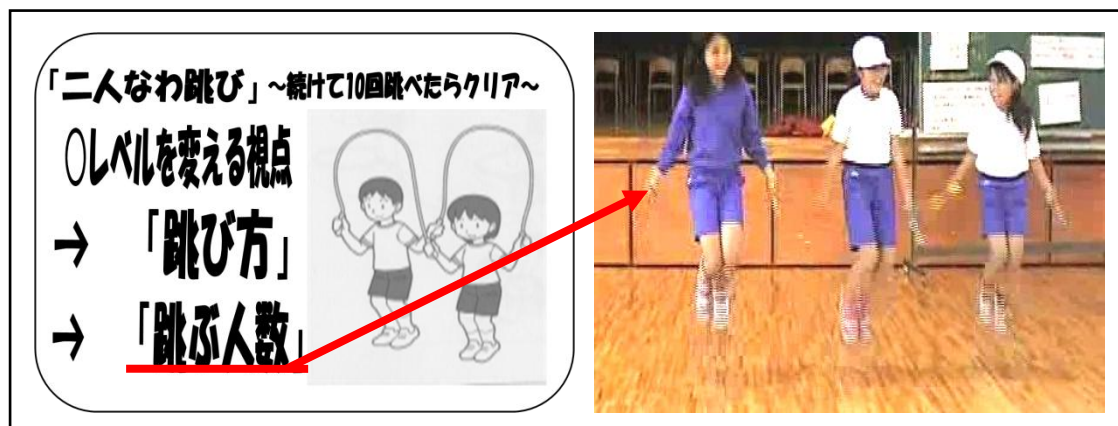
【写真 26：ノートを使った振り返りの様相】



(4) 自己の体力に応じた運動を把握するための資料

「つくり変える活動」の支援として、自己の体力に応じた運動を把握するための資料を提示した。運動を体験し、自分に合っていないと感じた子どもは、運動の難易度を変えるための視点を示した資料を見ながら、自分に合う難易度の運動へとつくり変えながら取り組むことができていた。

【資料 15：資料を参考に運動をつくり変えて取り組む様相】



以上のことから運動をつくり変える活動を活発にする具体的支援の工夫は、本研究における目指す子どもの姿への到達に有効であることがわかった。

Ⅷ 研究のまとめ

1 成果

- (1) 「子どもの実態や体づくり運動の特性に即した教材化の工夫」により、子どもたちは、体を動かす楽しさや心地よさを味わいながら動きを高めることができた。
- (2) 「運動をつくり変える活動を位置付けた活動構成の工夫」や「運動をつくり変える活動を活発にする具体的支援の工夫」により、子どもたちは、自己の課題を把握し、体力を高める運動の動き方を身に付けながら、自分の体力に応じた難易度の運動につくり変えることを通して、夢中になって体を動かすことができた。

2 課題

- (1) 動きをしっかりと身につけさせることを重視したため、体験させた運動の種類や数が少なかった。より多くの教材を提示し、様々なねらいをもった運動を数多く経験させることで、子どもの体力向上につなげる必要がある。
- (2) 体力を高めるためには、運動の日常化を図らなければならない。体を動かす楽しさや心地よさを味わわせた後、日常の運動習慣につなげる手だてを考える必要がある。

※引用・参考文献

- ・「小学校学習指導要領解説 体育編」 文部科学省 2008
- ・「中学校学習指導要領解説 保健体育編」 文部科学省 2008
- ・「高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編」 文部科学省 2009
- ・評価規準の作成のための参考資料 ー小学校ー 国立教育政策研究所教育課程研究センター2010
- ・「小学校 学習指導要領の解説と展開 体育編」 安彦忠彦 監修 高橋健夫・野津有司 編著
教育出版 2008
- ・「学校体育授業辞典」宇土正彦 監修 阪田尚彦・高橋健夫・細江文利 編集 大修館書店 1995
- ・「観点別学習状況の評価規準と判定基準」北尾倫彦 監修 山森光陽・鈴木秀幸 全体編集
高橋健夫 編集 図書文化 2011
- ・「すぐ使える 体ほぐしの運動136選」池田延行 監修 名古屋市体育研究会編
明治図書 2000
- ・「体ほぐしの運動」活動アイデア集 村田芳子 川口啓 山本俊彦 五十嵐淳子 編
教育出版 2001
- ・『『かかわり』を大切にしたい小学校体育の365日』 松田恵示・山本俊彦編
教育出版 2001
- ・学校体育実技指導資料 第7集 体づくり運動 ー授業の考え方と進め方ー 文部省 2000
- ・学校体育実技指導資料 第7集 体づくり運動 ー授業の考え方と進め方ー（改訂版）
文部科学省 2013
- ・すぐ使える！「体づくり運動」活動例集 小学校編 名古屋市体育研究会 編 明治図書 2011
- ・力を合わせて運動能力を高める！ 小学校体づくり運動 岩井邦夫 著 明治図書 2010
- ・「体力を高める運動75選」 神家一成 編著 東洋館出版社 2008
- ・「体育授業を変えるコーディネーション運動65選」東根明人 監修 明治図書 2006
- ・「体力づくりゲーム」 巡静一 編著 明治図書 1972
- ・「よく効くふれあいゲーム119」 諸澄敏之 著 杏林書院 2001
- ・「チャレンジ運動による仲間づくり」 ダニエルW・ミドゥラ ドナルドR・グローバー著
大修館書店 2000
- ・「体育授業を観察評価する」 高橋健夫 編著 明和出版 2003
- ・体育科教育 2001 4月号 大修館書店 2001
- ・体育科教育 2009 4月号 大修館書店 2009
- ・体育科教育 2011 1月号 大修館書店 2011
- ・「体育科教育学入門」高橋健夫 岡出美則 友添秀則 岩田靖 編著 大修館書店 2010
- ・体育の年間指導計画 福岡プラン 体育研究所調査研究報告書 福岡県体育研究所 2010
- ・「体育的学力」を育む授業づくり 体育研究所調査研究報告書 福岡県体育研究所 2013
- ・平成22年度 長期派遣研修員 研修報告書 福岡県体育研究所 2011
- ・平成23年度 長期派遣研修員 研修報告書 福岡県体育研究所 2012
- ・平成24年度 長期派遣研修員 研修報告書 福岡県体育研究所 2013

おわりに

「教師という職業は、やっぱりすばらしい。」

このことを改めて感じる事ができた1年間でした。福岡県体育研究所で1年間の長期研修の機会をいただいたことで、私は3つの喜びを味わうことができました。

1つ目は、「学ぶ喜び」です。

体育研究所では、専門研修において、大学の先生による講義や実技講習を受けることができました。最先端の体育科教育についての研修は、理論から実践までとてもわかりやすく学ぶことができました。研修後は、「明日にでも授業で生かしたい」と、いつも胸がわくわくしました。

また、指導主事からいただいた資料や所内にある書籍などを使って、わからないことがあれば納得いくまで調べ、追求することができる時間を与えられていることもとても魅力的でした。自分が今まで持っていた知識が、どれだけ曖昧で浅いものであったのかを痛感しました。「今まで知らなかったことを知ることができる」まさにその喜びの連続でした。

2つ目は、「子どもたちと関わる喜び」です。

本年度は、長期派遣研修員ということで、日常的に子どもたちと関わる事ができない立場となりました。今までは、当たり前のように子どもたちが周りにいて、一緒に学び、遊んでいたのに、そこから離れてみて、寂しさを痛感しました。検証授業では、「子どもたちを喜ばせたい」「力を高めたい」と心から思い、毎日遅くまで教材研究を行いました。授業の中で見せてくれた笑顔と「体育が好きになった」という感想に涙がこみ上げました。

3つ目は、「人の温かさに触れる喜び」です。

この1年間、新しい出会いが数多くありました。そして、たくさんのご指導をいただきました。時には、厳しい指導に自信を失うこともありましたが、しかし、いつでも私のことを気にかけてくれ、温かい励ましや優しい言葉をかけてくださいました。私は、そんな様々な「人の温かさ」に触れ、「この1年間で、絶対に成長してやる！」という気持ちを持ち続け、がんばることができました。

同じ立場で共に学んだ長期派遣研修員の2名の先生方も、1番年下でわがままな私を支えてくださいました。どんなにつらい時でも、一緒に乗り越えていける勇気を与えてくれました。

この1年間の研修を通して、これらのことを改めて感じさせてもらいました。心から「教師になってよかった」「体育研究所の長期派遣研修員を経験させていただいてよかった」と思います。

最後になりましたが、このような貴重な研修の機会を与えてくださいました福岡県教育委員会、筑豊教育事務所、飯塚市教育委員会に厚く御礼を申し上げます。並びに、本研究を進めるにあたり、温かい御指導をいただいた、教育庁教育振興部体育スポーツ健康課、義務教育課、福岡県体育研究所の方々に深く感謝申し上げます。また、飯塚市立庄内小学校の林校長先生、平山教頭先生、合澤主幹教諭をはじめ、快く検証授業に協力していただき、支援して下さった諸先生方、そして何より、明るく笑顔で一生懸命学習に取り組んでくれた庄内小学校5年1組の31名の子どもたちに深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

今後とも、より一層の御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年2月13日

長期派遣研修員 山田 光祐（飯塚市立庄内小学校）